



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『資本論』体系における論理と歴史
Author(s)	降旗, 節雄
Citation	北海道大學 經濟學研究, 14(2), 55-106
Issue Date	1964
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31120
Type	departmental bulletin paper
File Information	14(2)_P55-106.pdf



『資本論』体系における論理と歴史

降 旗 節 雄

は じ め に

われわれは、さきに『資本論』において、資本の生産過程の解明の前提としてあたえられている商品・貨幣・資本の範疇を、完全に発達した資本主義社会から抽象した純粋な流通形態として規定すべきであるとされる宇野弘蔵教授の所説にたいする諸批判を考察した。¹⁾これらの批判は、一方では、流通形態を「純粋資本主義」からの抽象としてとらえることは、「論理と歴史との統一」を破るものであり、商品・貨幣・資本の展開をもって、歴史的発展過程の理論的反映として処理すべきであると主張する。いうところの歴史的発展過程を、単純商品生産者の両極分解として理解するか、商品経済の拡大によるその生産過程への浸透過程として理解するかにより、宇野教授の所説にたいする批判の内容はかわってくるが、いずれにせよ、「純粋資本主義」を想定し、「永久にくりかえすかのごとき」[完結した理論体系を構築することは、資本主義の歴史性を否定し、そのいわゆる「発生、生成および消滅」の過程の究明を放棄するもの、あるいは『資本論』体系とこの現実の歴史的過程との内的関連を切断するものである、とする批判の基調はまったく同じである。

またぎゃくに、商品乃至貨幣を、「純粋資本主義」からの抽象として把握すべきことには同意しつつも、むしろそのゆえに、商品を純粋な流通形態として抽象するという主張にたいしては、形態規定は実体概念を前提としてはじめてあたえられるとして、『資本論』の冒頭であたえられている価値法則の論証を擁護しようとするのが、これらの批判の別の側面である。

われわれは前者にたいしては資本家的生産様式の完全なる支配を前提して

こそ、はじめて、産業資本への「必然的」な「発展の動力」をもつ流通形態を純粹に抽象しうることを指摘し、後者にたいしては、資本主義の原理的究明も、その歴史的・形成体としての生成、確立、爛熟の過程と無関係に逐行しうるものではなく、原理論が商品からはじまる資本の自己形成と自己編成の完結した体系とならざるをえないのも、この歴史的・形成体としての資本主義自体の発展過程とかかわるものであることを指摘した。

以上の二面における指摘は、しかし当然さらに根本的な疑問をよびおこすことになる。この指摘は、一体原理論の成立の根拠として、いわゆる「純粹資本主義」の想定を肯定するのか、否定するのか。

具体的には、一方で商品流通乃至商品生産の拡大過程をもってただちに資本家的生産様式の発生過程とみなすことを拒否しながら、他方では、「純粹資本主義の想定」を批判する一連の拙稿における主張は、「根本的ジレンマ²⁾に陥」³⁾しているとするものである。

古くからの価値論々争の出発点をなした『資本論』冒頭の商品は單純商品か、資本家的商品か、という疑問も、実は、資本家的生産様式の原理論としての『資本論』の展開は、資本主義の歴史的発展過程の論理的反映なのか、あるいはかかる歴史的過程を基礎としながらもこの現実的な歴史的発展とは一応きりはなされた純粹資本主義の内部分析なのか、という設問に設定しなおすことができよう。

その点では、この問題は歴史的過程を理論化する『資本論』の基本的方法と関連するのであって、本稿では、以上の問題に焦点をあわせつつ、『資本論』体系の抽象方法とカテゴリーの編別構成との関連にたいする考察を逐行することによって同時に拙稿への批判にお答えすることにした。

1) 拙稿「流通形態論の基本構造」(「北大経済学研究」第13巻、第2号所収)

2) 永谷 清「商品経済と資本主義」(「東大経済学研究」第2号所収) 42頁。

鎌倉孝夫「労働力商品のもつ意味」(「埼玉大学社会科学論集」第13号所収)

3頁。

1

われわれの考察を「経済学批判序説」（以下「序説」と略称する）の検討から開始する。それは、この「序説」がマルクスの古典経済学の批判的克服の成果の一応の総括であり、その意味で「ブルジョア経済の体制の批判的叙述」としてのマルクスの経済学のそれ以後の展開の方法的基盤を形成するものだからである。『経済学・哲学手稿』、『哲学の貧困』、『ドイツ・イデオロギー』などを主内容とする、かれの初期の経済学的研究は、いうまでもなく基本的には古典経済学の理論構造を踏襲しつつ行われたものであって、貨幣論や地代論などの個々の領域におけるブルジョア的限界の指摘はあったとしても、体系的に古典経済学を克服したものとはいえない。古典経済学の全体系的批判は、1850年の終りからはじまる永い研究の成果としてうちだされてくるのであって、その一応の成果が、この「序説」をふくむ『経済学批判綱要』（以下『綱要』と略称する）としてとりまとめられたのであった。

この「序説」は、古典経済学の批判をとおしてマルクスの経済学の独自の体系が形成されつつある過程におけるその方法にかんする草稿という意味において、一面では『資本論』体系にたいする方法的考察のきわめて重要な素材を提供することになるのであるが、しかし他面において、ここに展開された方法論が、『資本論』において結実するその具体的内容をともなった経済学批判の体系的構造を完全に解明するものとはなりえないであろうという点に充分留意されなければならない。「序説」の方法をもって、固定的に『資本論』の方法と等置することは、『綱要』以後のマルクスの経済学研究の深化と発展とを無視するという結果をもたらすことになる。

この「序説」は未定稿であって、「1. 生産一般、2. 生産、分配、交換および消費の一般的関係、3. 経済学の方法、4. 生産手段（生産諸力）と生産諸関係——生産諸関係と交換諸関係、等々」の4項目からなりたっている。しかし第4項目については、8点についての注意書きがしるされているだけであって、題目にあげられている問題については、内容的にほとんど立

入った考察はあたえられていない。したがって基本的には3項目からなりたっているともてよいが、この第1と第2の項目は、次にみるように、第3項目の問題を考察するための前提乃至準備的考察とみられる。したがってこの「序説」の基本テーマは、第3項目で展開されているものとみることができ。まず第1, 第2項目の内容からみていこう。

注)「序説」の冒頭に「1. 生産, 消費, 分配交換(流通)」という題目があげられており、「1. 生産, 2. 生産, 分配, 交換……」という区分は、この内部の項目である。この「1. 生産, 消費……」につづいて、どのような題目があげられる予定だったかは不明であるが、ともかくこの点からも未定稿であるといえよう。しかし、この点を無視して「序説」全体が「1. 生産, 2. 生産, 分配, 交換……」という4項目からなりたっているとしても、この第4項目が未完であるという意味で未定稿とみてよいであろう。

「1. 生産」においては、一般に「経済学」で「生産論」を「総論」としてまえにおくことにかんして検討がくわえられている。つまり、このように生産を一般的にあらゆる経済生活の基礎として抽象的に規定することは「共通のものを現実に浮きださせ、固定させ、それによってわれわれのくりかえす労を^{注)}はぶくかぎりでは、ひとつの合理的抽象である」と考えられているが、じつはそのような「生産一般」と特殊な社会段階における生産という関係は、「分配」においても成立するというのである。このような意味で「生産」だけに、「生産一般」といういわば自然法則的規定をあたえ、「分配ではこの反対に、人間は、事実上ありとあらゆる勝手なやり方をしてきた²⁾」として、生産と分配, 交換その他の範疇とを区別するのは、それだけでも誤りであるが、しかも、たとえばミルにおけるように、「生産」を「分配などと区別して歴史から独立した永遠の自然法則のわくにはめこまれたものとして叙述されるべきものである」とするばあいには、かならず「その機会に、まったくこっそりと、ブルジョアの諸関係が、社会一般の反駁できない自然法則としておしつけられる³⁾」ことになっているというのである。

注) この「生産一般」という「抽象」を「ひとつの合理的抽象である」とするのは、マルクス自身の積極的主張であるとして、「生産一般」を、流通関係の考察のま

えにおく『綱要』のプランを擁護し、かつ商品の「分析」を使用価値から開始する『資本論』の方法を合理化しようとする見解—たとえば、見田石介『資本論の方法』参照—があるが、これは誤りである。この「1. 生産」の項目の結論部分をみてもわかるとおり、マルクスはこれを古典派の方法として批判の対象としたのであり、このような「抽象的な要因」に帰着する「生産の一般的諸条件」—「生産一般」に「⁴⁾よっては、現実の歴史的な生産段階のどれひとつをも理解することはできない」ことを主張しているのである。

したがって、マルクスのこのような「生産一般」の規定にたいする考察の結論は次のとおりである。「すべての生産段階には、共通の諸規定があり、それらは思考によって一般的なものとして固定される。しかもいわゆるすべての生産の一般的諸条件とは、こうした抽象的な要因にはかならないのであって、それによつては現実の歴史的な生産段階のどれひとつをも理解することはできない。」⁴⁾

かくて以上のような「生産一般」の理解が、「分配、交換、消費」にたいし、どのような位置づけを要求するかが、次の「2. 分配、交換、消費にたいする生産の一般的関係」で考察される。ここでは「自然法則」としての「生産一般」を「出発点」とし「消費は帰着点として、分配と交換とは中間項としてあらわれる」という「経済学者たち」の「簡単明瞭な表象」⁵⁾も、これにたいする「分配は生産とならんで独立の他に依存しない領域をしめるものだという経済学的な考え方」から発する「諸要因がそれらの統一において把握されていない」という「非難」⁶⁾も、ともに「生産、分配、交換、消費」の関係を正しく規定したものとはいえないとして、「生産は直接に消費であり、消費は直接に生産であり」⁷⁾、さらに「分配」も「独立の領域として、生産とならんでその外部にある」⁸⁾のではなく、「交換もまたあきらかに生産のうちに要因としてふくまれる」⁹⁾ものであることを論証する。

ここでマルクスが「到達した結果は、生産、分配、交換、消費が同一だということではなくて、それらが一個の総体の全肢節を、ひとつの統一の内部での区別を、なしているということである。」「だから、ある一定の生産は、一定の消費、分配、交換を、これらのさまざまな諸要因同志の一定の関係を

規定する。もちろん生産もまた、その一面的形態においては、それとして、ほかの要因によって規定される」ということになるのである。そこで、このように「一個の総体の全肢節」として「統一」されている「生産、分配、交換、消費」という対象領域をどのような内的関連をとおして「有機的」な理論体系のうちに区分し、配置せしめるか、これこそが資本家的生産様式を対象とする「経済学の方法」の根本課題をなす。

さてこの「経済学の方法」においてマルクスは、「全体の混沌とした表象」としての「具体的なものからますます稀薄な一般的なものにすすんでゆき、ついにはもっとも単純な諸規定に到達し」、「それから、こんどはふたたび後方への旅をはじめ」、「ついにふたたび人口に」、「しかしこんどは全体の混沌とした表象としての人口ではなく、多くの規定と関連をもつ豊富な総体としての人口」¹⁰⁾に達する過程——「完全な表象が発散されて抽象的な規定となり」、「抽象的な諸規定が思考の道をへて具体的なものの再生産にみちびかれる」、いわゆる下向法、上向法としてしられる過程——を、「科学的に正しい方法」¹¹⁾としてとらえ、この「方法」における経済学的範疇の序列と歴史的発展過程との関連をあきらかにしている。

ここでは理論的範疇の展開と、現実的な歴史過程とは根本的に異質なものとして把握され、「抽象的なものから具体的なものへ上向する方法は、ただ具体的なものを自分のものにするための、それを精神のうえで具体的なものとして再生産するための、思考にとっての仕方にすぎず」、したがって「それはけっして具体的なもの自身の成立過程ではない」¹¹⁾点が強調される。

だから「単純な諸カテゴリー」が「具体的な諸カテゴリーに先だって、独立の歴史的または自然的な定在をもつ」かどうかは、「こととしたいによ」¹²⁾って考える以外にないということになる。つまり「貨幣」が「資本」や「銀行」や「賃労働」が「定在する以前に実在しうるように」、「比較的単純なカテゴリーは比較的未発達なひとつの全体の従属的諸関係を表現することができ」、「そのかぎりではもっとも単純なものから複雑なものへと上向してゆく抽象的な思考の歩みは、実際の歴史的過程に照応しているといえる」¹³⁾として

も、「比較的単純なカテゴリー」も「内包的にも外延的にも完全に発展した形ではなんといってもただ複雑な社会形態にしか属しえないものであ¹⁴⁾り、「もっとも抽象的なカテゴリーでさえ——まさにその抽象性のゆえに——すべての時代にたいしてあてはまるにもかかわらず、なおこういう抽象性という規定性の点で、それ自身やはり歴史的な諸関係の産物であるということ、そしてそれが完全にあてはまるのは、ただ歴史的な諸関係にたいしてだけであり、かつその内部においてだけである¹⁵⁾」というのである。

かくて「経済学的諸カテゴリーを、歴史上それらが規定的なものであった順序にならばせることは実行できないし、またまちがいであ¹⁶⁾り、「むしろそれらのカテゴリーの序列は、それらが近代ブルジョア社会のなかでおたがい¹⁶⁾にたいしてもつ関連によって規定されるのであるが、この関係たるやそれらのカテゴリーの自然的な関連としてあらわれるものの、または歴史的発展の序列に照応するもののまさに逆である¹⁶⁾」というのが、マルクスの理論的範疇と歴史的発展との関連についての最終的結論である。

しかし、このような「歴史的発展の順序」と「カテゴリーの序列」との関連をもってしては、なお「経済学の方法」としてただちにブルジョア社会の経済学的究明にたいする十全な分析基準をあたえうるものではない。

一面では、この「歴史的発展の順序」なるものを具体的にいかなるものとして把えるかによって、「こととしだいによる」とされた「歴史的発展の順序」と「カテゴリーの序列」との対応関係も変ってき、したがって「あるあたえられた国を経済学的に考察するばあい」の、「経済学的諸カテゴリー」の体系の資本主義社会にたいする分析基準としての利用の仕方も変ってこざるをえないからであり、他面では、「経済学的諸カテゴリー」の体系の「篇別について決定的な手がかりをあたえる」のは「歴史上それらが現実的なものであった順序」ではなく、「それが近代ブルジョア社会において相互にたいして有するところの関係によって定まって」くるとすれば、いうところの「近代ブルジョア社会」をいかなる構造において把握するかがさらに残された問題とならざるをえないからである。

「序説」における「経済学の方法」は、以上の問題にたいしてそれ以上たちいった考察をくわえることなく、その結論としていわゆる経済学批判の5部門分割の体系的プランをあたえているのである。

このプランと、マルクスのその後の経済学研究の成果の総括としての『資本論』の内容とを比較検討することによって、主として前者の問題をめぐって「経済学の方法」を、いわゆる3段階論の方法として純化し、定式化されたのが宇野弘蔵教授の論文「『経済学の方法』について」¹⁷⁾であった。

1) K. マルクス『経済学批判』岩波文庫版、289～290頁。(以下『批判』と略称する。)

2) 『批判』 293頁。

3) 『批判』 291頁。

4) 『批判』 294頁。

5) 『批判』 295頁。

4) 『批判』 297頁。

7) 『批判』 298頁。

8) 『批判』 304頁。

9) 『批判』 310頁。

10) 『批判』 312頁。

11) 『批判』 313頁。

12) 『批判』 314頁。

13) 『批判』 315頁。

14) 『批判』 316頁。

15) 『批判』 319頁。

16) 『批判』 323頁。

17) 宇野弘蔵『価値論の研究』所収。

2

宇野教授は、「序説」のいわゆる下向法と上向法とを、さらにたちいって次のように説明される。

「元来、17世紀の経済学者が、『生きた全体、すなわち人口、国民、国家、諸国家等をもって始めた』分析によって『僅かの規定をもった抽象的な・一般的な・諸関係、例えば、分業、貨幣、価値等をさがし出すことに終った』という場合、その抽象の過程は二重に行われていたのである。いうまでもなく、一方では個々の国々の特殊の関係が一般的な資本主義的商品経済関係に抽象され、他方ではこの資本主義的商品関係そのものにおいて、資本に対する貨幣、貨幣に対する商品といった抽象が行われなければならない。後者にとっては明らかに、『抽象的なものから具体的なものに向する方法』が『具体的なものを占有するための・すなわちそれをひとつの具体的なものとして精神的に再生産するための・思惟にとっての様式』に相違ないが、しかしかかる方法によって得られたる『具体的なもの』はマルクスの所

謂『具体的なる範疇』に過ぎない。それは前者の抽象によって得られる一般的な資本主義経済ではあっても、その出発点をなす『生きた全体、すなわち人口、国民、国家、諸国家等々』ではない。¹⁾

しかしマルクスにあっても、経済学的諸カテゴリーの把握は、「ブルジョア社会のもつとも近代的な定在形態」を前提とせずにはなされうべくもないこと、したがって「もっとも抽象的なカテゴリーでさえ」、「なおこういう抽象性という規定性の点で、それ自身やはり歴史的な諸関係の産物であるということ」は、自明のこととされていた。抽象から具体へのカテゴリーの展開は「けっして具体的なもの自身の成立過程ではな」く、カテゴリーの序列は現実の歴史的発展とは照応しないというのも、このようなカテゴリー把握の一帰結にすぎない。つまり「全体の混沌とした表象としてで」はなく、「多くの規定と関連とをもつ豊富な総体」としてあらわれる、この抽象から具体へと展開する有機的なカテゴリーの序列としての経済学の体系は、ただちに、非商品経済乃至非資本家的な諸要因との関連において進行する歴史的発展過程としてしか存在しえない現実の資本家的生産様式の具体的姿態を再現するものではないのである。

たしかにマルクスは、この下向と上向における具体的なものとは抽象的な規定との関連にたいして、「具体的なもののが具体的であるのは、それが多くの規定の総括であるからであり、したがって多様なものの統一だからである」という一般的な説明をあたえているだけであって、現実の歴史的過程における「具体的なもの」と、「抽象的なカテゴリー」の「統一」としての「具体的なもの」との間の根本的な差異については何ら論及していない。その点では、抽象から具体へのカテゴリーの展開が、同時に下向の出発点における「現実的で具体的なもの」乃至「現実的な前提」自体をただちに「再生産」するかのごとき誤解をあたえるおそれがあることは否定できないであろう。しかしマルクスは、同時に、この抽象から具体へのカテゴリーの展開を「具体的なもの自身の成立過程」として把握することを峻拒しているのであって、このカテゴリーの「統一」としての「具体的な総体が、思考された総体

として、ひとつの思考された具体物として、事実上思考の、概念作用の産物である」こと、要するに諸カテゴリーの「統一」としての「経済学の体系」は「あたまの中に思考された全体としてあらわれる全体」²⁾にほかならないことを強調することによって、この下向における「抽象」過程自体が、宇野教授のいわゆる「二重の抽象の過程」としておこなわれざるをえないことを事実上承認していたわけである。

宇野教授の「『経済学の方法』について」のもたらした功績は、したがって、マルクスの抽象方法のうちに事実上は逐行されつつも、たんに「多様なものの統一」として表現されていたにすぎなかった「具体的なもの」を、諸カテゴリーの「統一」たる「概念作用の産物」としての「具体的総体」と、現実の歴史的過程における「具体的なもの」とに、明確に概念的に区別し、その下向の過程における抽象作用の「二重」性を摘出した点にある。このような「抽象」過程の「二重」性の認識によって、一方ではヘーゲルにおけるような「実在的なものを、自分を自分のうちに深化し、かつ自分自身から動きだす思考の結果であるとする幻想」³⁾から完全に脱脚しうるとともに、他方においては、「カテゴリーは科学のうえでも、またそれがそれ自体として問題となるところでまずはじまるものだとは、けっしていえないということ」⁴⁾が明確となり、経済学体系におけるカテゴリーの「編別についての決定的な手がかり」を、「それらが近代ブルジョア社会のなかでおたがいにたいしてもつ関連」のうちに求める以外にないことが確認されることになるのである。

それゆえ、たしかに下向過程における「抽象」化の「二重性」を区別し、上向の結果たる諸カテゴリーの「統一」としての「具体的なもの」と、現実の歴史的な産物としての「具体的なもの」との差異を確認することは、経済学の体系を構築するための不可欠的方法的前提といわねばならないであろう。しかしこのような「抽象」過程の「二重」性の認識は、まだその経済学の体系的編別構成にとって十全なる方法的内容をあたえるものではない。

すでにみたように「序説」にあっても、事実上はこの抽象過程の「二重」

性は認識されていたのであるが、この「近代ブルジョア社会のなかでおたがい
にたいしてもつ関連によって規定され」た「経済学的諸カテゴリー」の
「篇別」は、いわゆる5部門分割プラン——1) 一般的抽象的諸規定、2) 資
本、賃労働、土地所有、3) 国家、4) 国際関係、5) 世界市場と恐慌——と
して総括されることになっているのもまた周知のとおりである。

すなわちマルクスはここで、唯物史観にもとづいて、「どんな有機的な全
体」においても「過程はつねに新しく生産からはじま」り、「交換と消費」
および「分配」⁶⁾「が包摂者となることができないのは自明である」という理
由から、資本家的生産様式の体系的編別構成においても「労働、分業、欲
望、交換価値」などを抽象的カテゴリーとして「固定」し、「国家、諸国民
間の交換、世界市場にまでのぼってゆく」過程をもって「科学的に正しい方
法」⁶⁾としたのである。

しかし一方では流通形態の諸カテゴリーである「価値、貨幣、価格など」
とともに、あらゆる歴史的構成体に共通する一般的概念である「労働、分
業、欲望」などを、無差別に「もっとも単純な諸規定」として一括して体系
の出発点におき、他方では、「資本」をもって「ブルジョア社会のいっさい
を支配する経済力」であると規定しながら、「ブルジョア社会」の「総括」
を「国家形態」においてあたえ、その「国際関係」および「世界市場」的関
連において編別の終結をあたえるという「序説」の方法的結論は、その後
におけるマルクス経済学の体系の理解について根本的難問を課することにな
った。

じっさいマルクスは、この「序説」で、単純なカテゴリーの例として、「交
換価値」や「貨幣」をあげるとともに、「労働」「労働一般」「たんなる労働」
をあげて、これらはともに「比較的具体的なカテゴリーにさきだって、歴史
上実在していたとしても、それは内包的にも外延的にも完全に発達した形で
は、なんといってもただ複雑な社会形態にしか属しない」「それ自身歴史的
な諸関係の産物であるということ」⁷⁾、いいかえれば、「もっとも発展した、も
っとも多様な生産の歴史的組織である」「ブルジョア社会」、つまり完全な発

展をとげた資本家的生産様式の内部においてしか抽象されえない点を強調している。ところがこの「交換価値」「貨幣」「労働一般」という抽象的カテゴリーは、マルクスのいうようにともに「内包的にも、外延的にも完全に発展した形」では、完全に発展した資本家的生産様式の内部においてしか把握できないとしても、「交換価値」や「貨幣」は流通形態における抽象的カテゴリーであり、「労働一般」は生産過程における抽象的カテゴリーであって、そのカテゴリーとしての性格をまったく異にしているという点にはふれられていないのである。たしかに「商品生産は、資本家的生産の基礎⁸⁾上ではじめて生産の正常的・支配的な性格として現象する」のであって、流通形態における抽象的カテゴリーも、生産過程におけるそれも、いずれも「完全に発展した形」では、完全に発展した資本家的生産様式を前提する以外に把握しようがないが、問題は、このカテゴリー相互の「序列」を「規定」する「近代ブルジョア社会のなかでおたがい⁹⁾にたいしてもつ関連」をどのような方法において確認するか、である。

「生産一般」を出発点とし、その成果としての生産物の交換による商品の生成、貨幣の形成をとおして、資本家的生産過程の解明にいたる『綱要』の基本構造⁹⁾は、このような「近代ブルジョア社会のなかでおたがい⁹⁾にたいしてもつ関連」によって規定された「カテゴリーの序列」のマルクスにおける理解の内容をしめしている。すなわち「あらゆる社会状態に固有な、したがって歴史的な性格をもたない」「生産過程一般」を基礎とし、「それ自体すでに歴史的産物」としての「流通」を媒介として、「両者の統一としての資本」が展開され、「資本の生産過程」はあらためてこの「資本」の規定の内部であきらかにされるといっているのである。しかもこのような「生産一般」、したがって「労働一般」と「流通」との関連の把握は、たんに『綱要』執筆段階にとどまらず、『資本論』においても、冒頭の商品の価値規定の事実上の前提とされているのであって、いわゆる「蒸溜法」による単純商品関係内における価値法則の論証も、このような「労働一般」に基礎づけられた流通関係把握の直接的帰結にほかならなかった。

マルクスはこの「序説」で、ブルジョア社会を「資本が支配している」「社会形態」としてとらえ、したがって「資本」を「出発点をなし、かつ終点をなし」すカテゴリーとして、「ブルジョア社会の内部の仕組をなし、かつ基本的諸特徴の基礎となっているカテゴリー」を「資本、賃労働、土地所有」と規定している。しかし、もちろんただちに「資本」を解明することはできず、「資本の概念を展開するためには、労働からでなく、価値から、しかもすでに流通の運動において発展した交換価値から出発することが必要であ」¹⁰⁾り、この「資本の概念」の「展開」の「出発点」が、経済学体系の「編別」の「序章」たる「一般的抽象的諸規定」の解明をとおしてあたえられることになっているのである。そして、この資本家的生産の前提を、マルクスは「商品生産」としてとらえ、「一般的抽象的諸規定」も、この「商品生産」内部における構成要素として位置づけられている。つまりここでは、資本家的生産が一般的に資本形態として抽象され、さらにこの資本形態から貨幣、商品というカテゴリーが流通形態の単純な規定として把握されているわけではない。

では資本家的生産を対象として商品生産一般をその抽象的カテゴリーとしてみちびきだすマルクスの抽象化の方法は、どのような現実的理由によってもたらされたのであろうか。これにたいしてはマルクス自身次のような説明をあたえている。「商品は、ブルジョア的富の成素形態として、われわれの出発点であり、資本成立の前提であった。他方において、商品はいまや資本の生産物としてあらわれる。われわれの叙述のこのような循環は同じく資本の歴史的発展に照応する。この発展にとっては、商品交換、商品取引がその成立諸条件のひとつをなすが、しかしこの条件自身は各種の生産段階の基礎の上に形づくられ、それらすべての生産段階にとって共通であるのは、それらの中に資本主義的生産がまだ全然存在しないか、あるいはまだ散在的にしか存在しないことである。他方、発展した商品交換、および生産物自身の普遍的に必然的な社会的形態としての商品という形態に至ってはじめて、資本主義的生産様式の結果なのである。……商品と貨幣とは資本のふたつの成素

的前提である。だがそれはある条件の下ではじめて資本に発展する。資本形成は、商品流通（貨幣流通をも含めて）の基礎、したがって、すでにあたえられたある程度繁栄した商業段階の基礎の上以外ではおこりえない。一方逆に商品生産および商品流通はその存在のために決して資本主義的生産様式を前提としない。むしろ、すでに以前にも論じたように、『前ブルジョア的社会形態に属する』ものでもある。これらは資本主義的生産様式の歴史的的前提である。だが他方において商品はまず生産物の一般的形態となり、あらゆる生産物は商品の形態をとらなければならない、売買は生産の剰余のみでなく、生産の実体自身にもおよぶ。種々の生産条件自身も包括的に流通から生産過程にはいる商品としてあらわれる。それは資本主義的生産の基礎の上でのみのことである。それゆえに一方では商品が、資本形成の前提としてあらわれるなら、他方では商品は、それが生産物の一般的成素形態であるかぎり、本質的に資本主義的生産過程の生産物および結果としてあらわれる。生産物はより以前の生産段階においても部分的には商品の形態をとる。これに反して、資本は自己の生産物を必然的に商品として生産する。それゆえに、また資本主義的生産の、すなわち資本の発展の程度において、商品について展開された一般的法則、たとえば価値にかんする法則も、貨幣流通の各種の形態で実現される。ここにおいてより以前の生産時代に属する経済的範疇さえも、資本主義的生産様式の基礎の上では、いかに特殊的に異なる歴史的性格をとるかがわかる。¹¹⁾

ここに歴史的形成体としての資本家的生産様式を対象とする一般理論化にとまとう方法的難点と、マルクスにおけるその解明の根拠とがともに語られているこ。

ここでいう「完成したブルジョア社会」を前提として一般理論体系を構築するさいの方法的難点とは次のように要約されよう。すなわち「序説」でもみたように、経済学の体系的編別のはじめにおかれるべき「もっとも抽象的カテゴリー」は、「内包的にも外延的にも完全に発展した形」では、「完全に発展したブルジョア社会」を対象として、そこから抽象する以外に、これを理

論的に把握することはできなかった。「もっとも抽象的なカテゴリー」でさえ、まさにその抽象性のゆえに、すべての時代にたいしてあてはまるにもかかわらず、なおこういう抽象性という規定性の点で、それ自身やはり歴史的産物であり、それゆえ抽象から具体への論理的展開と、その体系的編別構成は「歴史的発展の順序に照応するものの、まさに逆である」というのがマルクスの歴史と論理との関連についての総括的見解であった。だから「資本」の「成素的前提」たる「商品」という「抽象的なカテゴリー」さえ、「生産物自身の普遍的に必然的な社会的形態としての商品という形態」においては、まさに「資本家的生産様式の結果」としてしか把握できないことになる。そしてわれわれが、「商品」を「ブルジョアの富の成素形態として」経済学の体系的編成の「出発点」におくばあいには、当然、「各種の生産段階」における、いわば偶然的にあたえられる生産物の商品形態ではなく、まさに「生産物自身の普遍的に必然的な社会形態としての商品の形態」でなくてはならないであろう。そうでなくてはそれ自身の内的矛盾の発展をとおして、貨幣をうみ、資本を展開し、資本家的生産様式の基本的関係をあきらかにする「内的動力」をもった「抽象的なカテゴリー」とはいえないことになる。

それゆえ資本家的生産様式を理論的に解明するカテゴリーとしての「端緒の商品」は、「生産物自身の普遍的に必然的な社会形態としての商品」でなくてはならないが、このような商品は、じつは「資本家的生産様式の結果」としてしかあたえられず、したがってかかる商品は、すでに資本家的生産過程を前提とすることなくしては把握することはできないということになる。

資本家的生産様式を解明するための「もっとも抽象的なカテゴリー」さえ、資本家的生産過程の結果として、つまりこれから理論的に解明されるべき資本の理解なくしてはあたえられないというこの事態は、歴史過程の理論化にもなうひとつの根本的ジレンマを形成している。

マルクスは、しかし、「商品生産」と資本家的生産様式との歴史的関連を手がかりとしてこのジレンマを解決しようとした。かれはいう。「資本形成は、商品流通の基礎、したがってすでにあたえられたある程度繁栄した商業

段階の基礎以上以外ではおこりえない。一方逆に商品生産および商品流通はその存在のために決して資本家の生産様式を前提としない。むしろすでに以前にも論じたように『前ブルジョア的社会形態に属する』ものでもある。これらは資本家の生産様式の歴史的前提である。」このように「商品生産および商品流通」が、資本家の生産様式成立の「歴史的前提」であることが、「商品と貨幣」をもって「資本のふたつの成素的前提」として理論的に把握せしめる現実的根拠をあたえることになる。「生産物の一般的成素形態」としての「商品」は「本質的に資本家の生産過程の生産物および結果」としてしか把握することができないにもかかわらず、いいかえればそれは「資本家の生産過程」を理解することによってはじめて解明されうるカテゴリーであるにもかかわらず、「商品と貨幣」を「資本のふたつの成素的前提」とし、この展開をとおして解明された「資本の生産過程の生産物および結果」として、ふたたび「生産物の一般的成素形態」としての「商品」を把握するという「叙述のこのような循環は同じく資本の歴史的発展に照応する」というのである。

しかしマルクスはすでに「経済学的諸カテゴリーを、歴史上それらが規定的なものであった順序にならばせることは実行できないし、またまちがいであり、むしろそれらのカテゴリーの序列は、それらが近代的ブルジョア社会のなかでおたがいにたいしてもつ関係によって規定されるのであるが、この関係たるや、それらのカテゴリーの自然的関連としてあらわれるものの、または歴史的発展の順序に照応するもののまさに逆である」ことを強調していた。ところがいまや「商品」という「もっとも抽象的なカテゴリー」でさえ、それを「生産物」が「部分的」にとる「形態」としてでなく、「生産物の一般的成素形態」として把握しようとするならば、「本質的に資本家の生産過程の生産物および結果」としてしかあたえられないというのである。したがって「発展したブルジョア社会」のうちでは、これらのカテゴリーは、もっとも単純なそれも、より複雑な発展したカテゴリーによってその生成を規定されているとすれば、カテゴリー間の序列はひとつの「循環」とし

てしか把握できないことになる。

いわゆる抽象的なものから具体的なものへのカテゴリーの展開が、たんに単純なものから、その複合体としての複雑なものへの拡大過程としてあらわれるのではなく、はじめに前提された概念が、その概念自体の展開によってあらためて内在的に措定されることになるという、このような「叙述」におけるカテゴリーの「循環」は、経済学における対象としての、その「内的構造」においてとらえられ資本家の生産様式自体が、歴史的な形成体としてひとつの完結した「循環」をなす運動体であることにもとづくものである。

とはいえこのような「循環」的構造をもつ対象は、そのまま理論化するものではなく、かならずしもとも単純なカテゴリーから出発する完結的体系編成として構成する以外にその理論的把握の方法がないとすれば、このような「循環」的構造をもつ対象から、いかにしてそのカテゴリーの「序列」をみちびきだすかがふたたび問題とならざるをえないであろう。そしてここにおいてマルクスは、「資本の歴史的発生」の過程を基準としつつ、この対象の「循環」的構造をカテゴリーの序列編成体系へと転換せしめることによって、歴史過程の論理的再構成を実現したのであった。

したがって「商品と貨幣」を「資本のふたつの成素的前提」として抽象したマルクスの方法は、たんに歴史的過程の直接的模写でもなければ、また「完全に発達したブルジョア社会」の内部の関連を「資本の歴史的発展」とは無関係に抽象したものでもない。経済学的諸カテゴリーは、一面で「完全に発達した資本家の生産様式」を前提としつつ、他面では「資本の歴史的発展」を基準として、その「近代ブルジョア社会の中における経済的諸関係の組立」における「相互の関連」が論理的に確定されているのである。

ベーム・バヴェルクのマルクス批判を契機として、マルクス主義経済学者の間に混乱をひきおこした、端緒の商品は資本家の商品か、単純な商品か、という『資本論』の方法上の根本問題は、このようなマルクス自身の歴史的過程と対応するカテゴリーの論理的把握に、その発生の根拠をもっていたのである。

すなわち、歴史的・形成体としての資本家の生産様式を対象として一般理論の体系を構成するために主張されたマルクス的方法的見解が、じつは今見たように、「もっとも抽象的なカテゴリー」といえども、その抽象性のゆえに、「完全に発展したブルジョア社会」を対象とすることなくしては、その概念的把握はできないが、しかもこの一般理論の編別構成におけるカテゴリーの序列は、また「資本の歴史的発展」との「照応」によってあたえられるとする、いわば対象設定と概念構成とにおける二元的方法の交錯のうえに成立していたのである。端緒の商品規定における、いわゆる単純商品説と資本家的商品説の対立は、もともとマルクスの方法自体に内在した以上のようなふたつの契機が、それぞれ一面的に強調されて分化、対立した姿にほかならない。

- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1) 宇野弘蔵『価値論の研究』19頁。 | 2) 『批判』314頁。 |
| 3) 『批判』313頁。 | 4) 『批判』321頁。 |
| 5) 『批判』311頁。 | |
| 6) 『批判』319頁。 | 7) 『批判』319頁。 |
| 8) K・マルクス『資本論』青木文庫版⑤48頁。(以下『資』と略称する。) | 9) K・マルクス『経済学批判綱要』226頁参照。(以下『綱要』と略称する。) |
| 10) 『綱要』170頁。 | |
| 11) K・マルクス『資本論綱要』(岩波文庫版)244～5頁。 | |

3

「前ブルジョア的社会形態に属する」「商品生産および商品流通」を「資本家的生産様式の歴史的・前提」とし、「売買が生産の剰余のみでなく、生産の実体自身にもおよぶ」過程をもって、いいかえれば「自己の労働の生産物のかわりにむしろ自己の労働自身を、より正確に言えば自己の労働能力を売るようになった時に、生産はその全容量、深さおよび幅からいって充分に商品生産となり、あらゆる生産物は商品に転化され、個々のあらゆる生産部面の対象的条件は自ら商品として生産にはいる¹⁾」ことをもって、この「商品生産および商品流通」からの「資本家的生産様式」への転化の過程であるとするのが、マルクスの「資本の歴史的発展」の把握の基本構造であった。

しかしこのような「発展」過程が、理論的展開にたいし、「歴史的発展」として、現実的な資本の発生史として理解されるとすれば、さらに立入って、マルクスにおいては本来理論にたいする歴史はいかなる意味において対応乃至対置せしめられ、現実の歴史過程の理論化はどのような方法的過程において逐行されているのかが問われねばならぬであろう。

何故なら、マルクスにあっても「いわゆる本源的蓄積」の解明において、「資本の前史」を、資本家の生産の内的構造の叙述からはなれて、その歴史的「出発点」として明らかにするばあいには、このような「資本の歴史的発展」とは異った歴史過程がとりあつかわれているからである。この『資本論』第1巻末尾の第24章「いわゆる本源的蓄積」は、それまでに展開された「いかにして貨幣が資本に転化され、資本によって剰余価値がつくられ、剰余価値からより多くの資本がつくられたか」²⁾についての、「資本家の生産様式の結果」を前提としたその内的関連の理論的究明にたいし、「資本家の生産様式」の「出発点たる蓄積」を「本源的蓄積」として解明する歴史的補足部分をなしていることは周知のとおりである。ここでは「資本関係」の「前提」を「労働者と労働実現条件の所有との分離」としてとらえ、かつ「資本家社会の経済的構造は封建社会の経済的構造から出発し」「後者の解体が前者の諸要素を遊離させた」³⁾ものとして、「封建社会の経済的構造」の「解体」が「資本関係」の「前提」³⁾をいかにして形成するかが考察の基本テーマとなっている。

すなわち「賃労働者ならびに資本家を生みだした発展の出発点は労働者の隷従制であり」⁴⁾、「その進展の本領は、この隷従の形態変換、すなわち封建制的搾取の資本制的搾取への転換にあった」とし、この「形態転換」乃至「転化」の「経過」を「本源的蓄積」として歴史的に位置づけるのである。したがってこの章で解明されるべき歴史過程の内容は「封建社会の経済的構造」を「出発」点とし、そこから「一方の極には労働諸条件が資本として現われ、他方の極には自分の労働力以外には売るべき何物もない人々が現われる」という二面的な過程ということになる。

この観点にもとづいてこの章を構成する全7節の関係をみれば、およそ次のように理解されよう。

すなわち「第1節、本源的蓄積の秘密」は、全体の序論として、資本家的蓄積の内的関連の理論的究明をおこなった前章までの展開にたいして、その歴史的「出発」点の意義をあきらかにする。そしてこの「全過程の基礎」をなすものとして「第2節、農民からの土地の収奪」は、「直接的生産者を賃労働者に転化する過程」を、それが「古典的形態」をとるイギリスを例として説明し、ついで「第3節、15世紀末以来の被収奪者にたいする流血的立法、労賃圧下のための諸条例」において、この暴力的に土地から追放された無産者が「グロテスクで、テロル的な法律」によって、近代的賃労働者へと陶冶されてゆく過程の説明をもって補足する。これにたいし第4節乃至第6節は、以上の過程のメダルの裏側をなす「社会的生活手段および生産手段を資本に転化する過程」を、農業部面と工業部面とにわけて、それぞれ「資本家的借地農業者の創生記」および「産業資本家の創生記」として明らかにする。この中間におかれる第5節は、この「農業革命の工業への反作用」を「産業資本家のための内地市場の作出」の過程として明らかにすることによって農業部面の資本主義化の工業部面の資本主義化にたいしてもつ意義を闡明することになっている。かくして農業、工業両部面にわたって近代的賃労働者の創出と資本家階級の創生記とを明らかにしたのちに、「資本家的蓄積の歴史的傾向」を、そのいわゆる発生、確立、没落の過程において定式化しつつ総括するのが、その最終節、第7節の内容をなすのである。

以上のような展開をもつ「第24章」について、まず指摘しておかねばならないのは、ここで前提とされている「資本家的生産の基本条件」とは、それが「生産者と生産手段との歴史的分離過程」によってあたえられるとされている点からも明らかなように、これをより正確に言えば産業資本成立の「基本条件」にはかならないということである。つまりここでいう「資本関係」とは産業資本的蓄積過程における資本と賃労働との対抗関係以外のなにものでもない。

これは「貨幣の資本への転化」の理論的考察において、一方では「資本の一般的範式」を「G—W—G」において規定し、したがってそれを「産業資本」にも「商業資本」にも「利子うみ資本」にも共通する「直接に流通部門で現象する資本の一般的範式」⁶⁾としてとらえながら、「資本の基本形態にかんする」現実の「分析」においては、「資本の卑近なこのいわば大洪水前的な諸形態すなわち商業資本および高利貸資本は、さしあたり全く顧慮されずにおかれ」、「資本」の「歴史的な実在諸条件は商品流通および貨幣流通とともに決して定在せず」、「生産手段および生活手段の所有者が、自分の労働力の販売者としての自由労働者を市場で見いだすばあい⁶⁾にのみ成立するのであり、そしてこの歴史的條件はひとつの世界史を包括する」として、結局、商品および貨幣にたいする資本の概念をただちに産業資本の概念と等置し、産業資本以外の資本形態を資本の理論的取扱いからまったく排除したのに対応した処理の仕方であるといわねばならない。

したがって、ここで明らかにされているように、「封建社会の構造から出発」する「資本関係」の「創造」過程は、一方では「農村生産者、農民からの土地収奪」を「全過程の基礎」としつつ進行するのであるが、また同時にそれは「本来的マニファクトゥアの時代」においても「何らの根本的変化も生ぜしめ」ることなく「継続的」⁷⁾に発展し、「家内的、農村的工業の根底——紡績業と機織業——をむしりとる」ことによって「大工業がはじめて、機械をもって資本家の農業の不変の基礎を提供し、農民の大多数を根本的に収奪し、農耕と家内的農村的工業との分離を完成」し、かくて「大工業がはじめて産業資本のために全内地市場を征服する」⁸⁾にいたるということ、すなわち機械制大工業の発展をまっけて、はじめて「労働者と労働条件との分離過程は完成」⁹⁾し、「資本関係」はその成立の「基礎」を確立するにいたるとしなくてはならないであろう。

つまりマルクスにあっては、資本主義の確立とは、機械制大工業によって基礎づけられた産業資本的蓄積様式の社会的支配を意味するのであって、この「資本関係」の「前提」を形成する「生産者と生産手段との歴史的分離過

程」は、「封建社会の経済的構造」の「解体」過程として資本主義の「前史」をなすとともに、「古代的生産様式から近代的生産様式への移行」¹⁰⁾の過程として位置づけられることになった。ことばをかえていえば、この歴史的段階は、資本主義自体の歴史的発展段階としては位置づけられていないのである。

しかしこのような歴史過程の取扱いは、この章の最終節において「資本家的蓄積の歴史的傾向」を総括するにいたって、やや異った視角から訂正をうけることになる。というのは、ここでは「資本家的蓄積の歴史的傾向」を、生産手段の所有関係の変化を基軸として把握し、したがって「資本家的蓄積」の基礎をなす所有関係は、封建社会や奴隷制社会における共同体的所有と、社会主義的所有との両者にたいし、私的所有として規定されるとともに、その歴史的変遷過程は、私的所有の変化の過程としてたどられることになるからである。

すなわち、すでにみてきたように、「個人的で分散的な生産手段の、社会的に集中された生産手段への転化、したがって多数者による少量的所有の少数者による大量的所有への転化、したがって広汎な人民大衆からの土地や生活手段や労働用具の収奪——人民大衆のこの怖るべき、かつ非道な収奪こそは、資本の前史をなす」¹¹⁾のであるが、これを生産手段の所有関係という点において総括するならば、「みずから働いてえたいわば個々の独立の労働個人とかれの労働諸条件との癒着にもとづく私的所有が、他人の・しかし形式的には自由な・労働の搾取にもとづく資本家的私的所有によって駆逐される」過程として把握され、さらに「この転化過程が、旧社会を深さおよび広さからみて充分に分解させてしまえば、労働者がプロレタリアに転化し、かれらの労働条件が資本に転化してしまえば、資本家的生産様式が自分の脚で立つことになれば、ここに労働のいっそうの社会化、および、土地その他の生産手段の社会に利用される生産手段つまり共同的生産手段へのいっそうの転化、したがって私的所有のいっそうの収奪が、新たな形態をとる。いまや収奪されるべきものは、もはや自営的労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつ

ある資本家である。かかる収奪は資本家の生産そのものの内在的諸法則によって、諸資本の集中によって成就される。ひとりずつの資本家が多くの資本家を打ち滅ぼす。」こうして「資本独占は、それとともにまたそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらが資本家の外被と調和しえなくなる時点に到達する。この外被は粉碎される。資本家の私有財産の最後の時が鳴る。収奪者が収奪される¹²⁾」に至るというのである。

ここでは、以前に封建社会から資本主義社会への移行乃至転化の過程とされていた、いわゆる本源的蓄積の時期が、生産手段の所有関係という観点から、「個々の独立の労働個人とかその労働諸条件との癒着にもとづく私的所有」として、「資本家の所有」と対置せしめられることによって、いずれも私的所有の一発展段階として位置づけられることになり、前者から後者への転化は、「私的所有」の「形態」変化の過程として把握されることになっている。そして「ひとりずつの資本家が多くの資本家を打ち滅ぼす」「資本の集中」過程をとおして、この生産様式の「最後の時が鳴る」という規定は、同時に私的所有一般の否定、その社会主義的所有関係への転化の契機の私的所有関係内部での形成過程として把握され、「資本家的生産様式の確立」過程を中軸として、「個々の独立の労働個人とかれの労働諸条件との癒着にもとづく私的所有」の段階と対比されることによって、ここに「資本家的生産様式から発生する資本家の取得様式は、したがって資本家的な私的所有は、自分の労働を基礎とする個人的な私所有的の第1の否定である。だが資本家的生産は、一自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生みだす。これは否定の否定である。」¹³⁾という特有のトリアーデのうちに位置づけられることになる。このような私的所有の弁証法的発展を中心として「資本家的蓄積の歴史的傾向」は、いまや「個人の自己労働にもとづく分散的な私所有的の、資本制的な私的所有への転化」と、「資本制的な所有の社会的所有への転化」とをもって、その成立期と終末期とを劃することによって、いわゆるブルジョア社会の「発生、生成および消滅」の過程として規定されることに

なるのである。

「労働者が自分の生産手段を私有すること」を「基礎」とする「小経営」は、こうしてひとつの独立した「生産様式」¹⁴⁾として、一面では資本家的生産様式成立の前提をなす商品経済社会の一発展段階として規定されるとともに、他面ではそれ自体の内部に独自のいわゆる生産力と生産関係との矛盾を包蔵した自立的生産様式として、資本家的生産様式と対立せしめられ、社会主義体制や封建的生産様式とならぶ歴史上のひとつの発展段階として把握されることになった。

「特定の高度に達すれば、この生産様式は、それ自身の破壊の物質的手段をうみだす。この瞬間から、この生産様式を桎梏と感ずる諸力や情熱が社会の胎内で動きだす。この生産様式は破壊されねばならぬし、また破壊される」¹⁴⁾というマルクスの指摘は、唯物史観のいわゆる生産力と生産関係との矛盾の規定を、直接この「小経営」的「生産様式」に適用したものであり、そのかぎりでは、この「生産様式」は、その内部に他の生産様式のそれとは異なる独自の生産力と生産関係の矛盾を包蔵した、「アジア的・古代的・封建的および近代ブルジョア的生産様式」に比肩しうる、独立した「経済的社会構成が進歩してゆく段階」のひとつとして把握されているものとせざるをえないことは自明であろう。

しかしこのような「小経営」的「生産様式」の規定は、この章における前節までの展開とは根本的に異質な歴史把握の方法といわねばならない。

マルクスも「いわゆる本源的蓄積」を「生産者と生産手段との歴史的分離過程」として規定するさいには、「資本主義社会の経済的構造」を「封建社会の経済的構造から出発したもの」として、この原蓄についても「後者の解体」をとおして前者の諸要素を遊離せしめた点にその歴史的役割をみとめていた。すなわちここでは歴史的発展段階として自立的な生産様式をなすのは「封建社会」と「資本主義社会」とであって、いわゆる「自分の労働を基礎とする個人的な私的所有」にもとづく「小経営」なるものは、一面では封建社会の解体の結果としてあたえられるとともに、他面では同時にそれ自体商

品経済の発展によって「直接の刺戟」をあたえられた「大封建領主」によって、さらにまた「商人資本」によって、あるいは「マニュファクチュア」によって、最終的には「大工業」によってたえずその基礎を破壊され、収奪される過渡的経営形態として位置づけられているのである。

その点からすれば、この「自分の労働を基礎とする個人的私的所有」にもとづく「小経営」の存在は、それがいかに社会的階層のうちに大きな比率をしめ、「繁栄し、その全精力を発揮し、適当な古典的形態¹⁵⁾をとったとしたところで、それ自体「封建社会」や「資本主義社会」と対置せしめられる歴史的過程において一段階を劃する「生産様式」たりうるものではなかったのである。事実マルクスも「本源的蓄積の歴史において歴史的に劃期的なものは」「わけても人間大衆が突然かつ暴力的にかねらの生活維持手段からひき離されて無一物なプロレタリアとして労働市場に放りだされる瞬間」であるとして、「農村生産者・農民・からの土地収奪」をもってこの段階における歴史的全過程の基礎としているのであり、この「全過程の基礎」としての「農村民からの土地の収奪」の過程は、マルクス自身あきらかにしているように、けっして「労働者が自分の生産手段を私有する」「小経営」的「生産様式の内部の生産力と生産関係との矛盾の展開によってひきおこされたものではなく、したがってこの「生産様式」が自己の内部から「それ自身の破壊の物質的手段を生みだ」したわけではなかったのである。むしろ「いわゆる本源的蓄積」の過程の解明が、内容的には「直接的生産者の収奪」の過程として逐行されており、したがってその具体的展開は、「王権や議会と頑強に対抗」しつつ「大封建領主が農民を土地から暴力的に狩りたて」「農民の共同地を横奪すること」によって「プロレタリアートを創造」した歴史的事実から開始されていることから知られるように、この「本源的蓄積」過程の出発点は「16世紀において資本の近代史を開始」した「世界商業および世界市場」の展開に媒介された「フランドル地方の羊毛工業の繁栄とそれに照応する羊毛価格の騰貴」に「直接の刺戟」をあたえられつつ進行した封建社会自体の解体過程として把握されているのである。すなわち「イギリスでのみ

古典的形態をとる」とされている。この「本源的蓄積」の過程は、この「大封建領主」の土地とりあげや、「封建的家臣団の解体」や「宗教改革とその結果たる巨大な寺領盗奪」にはじまる初期段階から、「18世紀に資本農場または商人農場と呼ばれた大借地農場を膨脹させ」た「国有地の盗奪」および共同地の組織的窃盗¹⁵⁾の段階をとおして、「最後に」「19世紀に支配的だった」「土地の清掃」¹⁷⁾にいたるまで、その収奪の主体と方法とは変化しながらも、結局は「封建的および氏族的所有の近代的所有への横奪的転化」¹⁸⁾の過程として総括されることにならざるをえないのである。

したがってこの時期の全体的社会構造は、歴史的過程としては、封建的社会構成から産業資本的社会構成への過渡期乃至移行期をなし、それ自体封建的社会構成乃至資本主義的社会構成とならぶ独立したひとつの社会構成体をなすものではない。つまりこの段階を歴史的発展過程において位置づけるかぎり、封建社会の解体過程であるとともに、産業資本の諸要素を形成しつつある過程として、しかもこの全過程が「世界商業および世界市場」的発展を基礎とする「新世界市場の商業的要求」¹⁹⁾によって誘導されつつ「社会の集中的で組織的な暴力たる国家権力を利用」して行われた封建社会の解体と産業資本の諸要素の創造過程であるという意味において、まさに資本主義の初期段階を形成するものであった。

しかしマルクスにおいては「多かれ少なかれ、時間的序列をもって、殊にスペイン、ポルトガル、オランダ、フランスおよびイギリスに配分され」、結局「イギリスにおいて」「17世紀末に植民制度、国際制度、近代的な租税制度および保護制度として体系的に総括された」「本源的蓄積の相異なる諸契機」²⁰⁾の展開する時期を全体として、産業資本の支配する自由主義段階にたいする重商主義の段階として、資本主義の歴史的発展過程のうちに位置づけることはできなかった。というのは、『資本論』にあっては、すでにみてきたように資本主義はまさに産業資本として把握され、しかも産業資本としての資本主義の発展は、たんにイギリス国内において「近代的社会の三大段階」への純化によってしめされる、その完全なる支配を確立するばかりでなく、

かかる産業資本の支配する「世界支場の網の目へすべての国民」を「編入」せしめることによって、この「資本家的体制の国際的」支配の展開のうち、遅かれ早かれあらゆる国民をその内部に包摂した世界産業資本の体制として、自己を完成するにいたるという歴史把握をもって資本主義の「歴史的傾向」は総括されていたからである。^{注)}

注) たとえばエンゲルスは社会主義革命との関連において、次のようにマルクス主義者の資本主義の歴史的体制把握を明らかにしている。「大工業が世界市場をつくって、地球上のすべての国民、とりわけ文明国民を、たがいにむすびつけたので、どこの国民でも、よその国におこったことと無関係ではいられない。それにまた大工業はあらゆる文明国でその社会の発展をおなじようにしてしまったので、ブルジョアジーとプロレタリアートとは、すでに社会のふたつの決定的な階級となっており、そしてこのふたつの階級のあいだの闘争は、すでに現在のおもな闘争となっている。」社会主義革命を「ひとつの世界革命であり、したがって世界全体におこる」²¹⁾ものとしてとらえる、いわゆる世界革命論は、したがって産業資本体制の世界的支配というこの段階でのマルクス主義者の資本主義把握と対応した革命規定であり、帝国主義段階論を基礎とするいわゆる一国革命論とは、その点で根本的な方法的差異をもつというべきであろう。

しかし周知のように19世紀末からの資本主義発展の「歴史的傾向」は、実際にはこのような把握とは根本的に異った様相において具体化したのであって、この時期を境として一面では、19世紀中葉まで進展してきたイギリスにおける機械制大工業にもとづく産業資本の支配の拡大と、その社会的表現である「3大段階」への純化の過程が、むしろ産業資本にたいする異質な要因によってその展開が阻害されることになり、他面では産業資本の世界的支配のもとにくみいれられて、終局的にはイギリスと同様の全面的な産業資本主義化の過程をたどると想定されていた後進国が、重工業を基幹産業として株式会社形式による新たな資本蓄積様式をとることによって、資本主義は世界的に自由主義段階にたいする異質な発展段階としての帝国主義段階へと転化することになった。

このような資本主義の現実的発展における変質過程は、もとより『資本論』執筆段階においてマルクスの予想した「資本家的蓄積の歴史的傾向」と

は全く異なるものであった。²³⁾

注) 現行『資本論』の序文でM・E・L研究所は、マルクスは『資本論』において帝国主義の「時代を予見した」として、次のようにのべている。「マルクスが著述したのは自由競争の時代であり、産業資本の支配の当時であった。かれは独占の時代、金融資本の支配の時代までは体験しなかった。しかしかれはその時代を予見した。かれは資本の基礎的な運動諸法則を発見して説明したのであり、かくして現代の帝国主義を生ぜしめた諸傾向を指摘した。かれは帝国主義の最も重要な諸現象の若干を予言したのである。」そして、「マルクスが『資本論』において、銀行資本の新たな役割に論及し、また独占の停滞的で寄生的な性格をつきとめ」さらに「当時では新しかった株式会社形態の矛盾を分析しながら現代の金融資本をめぐりに予告し、そして独占をば、死滅しつつある資本主義として、『資本が生産者たちの所有に再転化するための必然的な通過点』として特徴づけた」点²²⁾をあげている。すなわちマルクスによる「帝国主義段階を生ぜしめた諸傾向」の「指摘」なるものの具体的内容は、「銀行資本の新たな役割」、「独占」、「株式会社形態の矛盾」の3点である。しかし『資本論』では、レーニンの『帝国主義論』におけるような意味での、いわゆる「銀行とその新しい役割」がとりあげられているわけではない。レーニンのばあいには、帝国主義段階において、銀行が『仲介者』の役割から成長して、ひとにぎりの独占者の連合に転化した²³⁾点を主としてドイツの大銀行を素材として説明しているが、マルクスにおいては「銀行により、資本の配分は私的資本および高利貸の手からひとつの特殊な業務として、社会的機能として、引上げられて」いることから、「銀行および信用」が「資本家的生産をしてそれ自身の諸制限をふみこえさせる最有力な手段となり」さらに「資本家的生産様式から結合労働の生産様式への移行中に信用制度が有力な傾軋として役立つであろう」ことが推測されているにすぎない。また「独占」についても、「資本家的生産そのものの内容的諸法則の作用によって」たんに「少数の資本家による多数の資本家の収奪」の進行にともなう「あらゆる利益を横奪し独占する大資本家数のたえざる減少」の過程が「資本独占」²⁴⁾として規定されているのであって、産業資本の自由競争の過程にたいして、いわゆる金融資本的な組織的独占体の成立をといっているのではない。さらにまた、たしかにマルクスのいうように、「株式会社の形成」によって資本は「私的企業に対立する社会—会社企業として登場」し「現実機能する資本家が他人の資本のたんなる支配人・管理人に転化し、資本所有者がたんなる所有者・たんなる貨幣資本家に転化する」傾向が現われてくるというよいであろう。そしてこの点をさして、マルクスは「資本家的生産の最高の発展のこうした成果は、資本が生産者たちの所有に再転化するための必然的な通過点である」²⁵⁾というのである。しかし株式会社形式はいうまでもなく、資本所有から資本機能を完全に「分離」させるものではなく、現実には、

一方では私的所有は確保されつつも支配権を失った株主と、所有をうわまわって支配を集中する資本家とに株主自身が分裂してくるのであって、一般的に社会的に形成された資金を特殊な形で資本家の企業が利用する形態にすぎない。しかも『資本論』では、株式会社を一般的利潤率の低落を阻止する要因のひとつとしてあげながら、「この項目にはさしあたり深入りできない」²⁷⁾としていることからもしられるように、一般的な産業企業においてでなく、例外的に公共事業的な「鉄道、鉱山、航運業等々」で利用される特殊な資本形式としているのであって、その点から資本家の生産様式の一般の究明からはのぞかれているのである。株式会社形式が帝国主義段階においてしめる資本範疇としての意義は、もとよりこのようなものではなく、むしろ重工業を中心とする後進国の急速なる資本主義化のための資本の存在様式となることによって、金融資本成立の不可欠の前提として新たに位置づけられることになるのである。以上のような意味で、「銀行資本」にしる、「独占」にしる、「株式会社」にしる、すでにマルクスにおいて金融資本の時代を「予見」して、その基本的「諸傾向」解明のための経済学的範疇として規定されていたとするのは誤りである。

しかし金融資本の時代を、資本主義の歴史的発展過程における一段階として把握するということは、「資本家の蓄積の歴史的傾向」をたんに産業資本的発展の世界的規模における純化、拡大の過程として認識するという点に修正をもたらすばかりでなく、同時に、資本主義の歴史的形成体としての把握と、その「内的構造」の「観念的平均における叙述」としての『資本論』体系の論理構成にとっても、根本的な再検討を要請することになるのである。

- | | | |
|-------------------------------|------------------|------------------|
| 1) 『資本論綱要』 246 頁。 | 2) 『資』④ 1092 頁。 | 3) 『資』④ 1095 頁。 |
| 4) 『資』④ 1125 頁。 | 5) 『資』② 297 頁。 | 6) 『資』② 319 頁。 |
| 7) 『資』④ 1139 頁。 | 8) 『資』④ 1140 頁。 | 9) 『資』④ 1155 頁。 |
| 10) 『資』④ 1151 頁。 | 11) 『資』④ 1158 頁。 | 12) 『資』④ 1159 頁。 |
| 13) 『資』④ 1160 頁。 | 14) 『資』④ 1158 頁。 | 15) 『資』④ 1157 頁。 |
| 16) 『資』④ 1108 頁。 | 17) 『資』④ 1114 頁。 | 18) 『資』④ 1120 頁。 |
| 19) 『資』④ 1142 頁。 | 20) 『資』④ 1143 頁。 | 21) 「共産主義者同盟」 |
| (マルクス・エンゲルス選集、第2巻) 478 頁。 | | 22) 『資』① 3 頁。 |
| 23) レーニン『帝国主義論』(国民文庫版頁) 45 頁。 | 24) 『資』⑪ 857 頁 | |
| 25) 『資』④ 1159 頁。 | 26) 『資』⑪ 621 頁。 | 27) 『資』⑨ 350 頁。 |

4

産業資本の確立、展開の過程が、いわゆる自由主義段階として、「封建社会の経済構造」を「出発点」としかつその「社会的所有への転化」をもって「最後」を劃される資本主義の歴史的発展過程における一段階として確定されたのは、資本主義の現実的運動において19世紀末を劃期として「資本主義と商品生産一般との基本的特質である「自由競争」が、その「直接的な対立物」たる「独占」に「¹⁾とってかわられた」という歴史的事実を根拠とする、「資本家の蓄積の歴史的傾向」の『資本論』的把握にたいする修正であった。しかしこのような歴史過程の現実的展開にもとづくその「傾向」把握の修正は、たんにそれにとどまるものではなく、同時に「資本の前史」とされた本源的蓄積の過程にたいしても、これをたんに封建社会から資本主義社会への転化の過程、あるいは封建社会の「解体」が資本主義社会の「諸要素を遊離」させた過程としてだけでなく、といってももちろん「自分の労働を基礎とする個人的な私的所有」にもとづく「小経営」の支配する自立したひとつの「生産様式」などではなく、世界市場と世界商業を背景とする商人資本による中世的農民経済の農業と工業とへの商品経済的分離過程として、すなわち、まさに産業資本、金融資本の支配する資本主義の確立期および終末期の発展段階にたいし、商人資本の支配する初期段階としてこれを位置づけることを可能かつ必然にしたのであった。

そしてこのように資本主義の世界的発展過程を段階的に位置づけることは、また同時に、商品経済による社会的再生産過程の全面的支配として成立する資本家の生産様式も、その現実的展開においては、商品流通の生産過程への浸透、支配の過程としてその確立をみながら、世界的にはもちろんイギリス国内の全生産過程をも完全には支配しつくすことなく、一定の時期をすぎると旧来の社会にたいする分解作用を全面的に推進するのではなく、これをむしろ資本の価値増殖の基礎として利用する特殊な支配形式を展開しつつ、その初期段階にたいする後期乃至終末段階へと転化したことを意味

する。

19世紀20年代から60年代にいたるイギリスにおける産業資本の発展を基軸とする世界経済の発展も、マルクスの想定していたような「世界市場の網の目へすべて国民」を「編入」し、後進諸国も先進国イギリスと同一の生産様式を採用することによって「資本家の体制の国際的支配」を完成するものではなかったのはもちろんのこと、当のイギリスにおいてさえ、原料や食料の輸入および工業製品の販売市場という二面において、世界市場との関連を媒介にしてしかその産業資本の支配を確立できなかったという事態を反映して、その内部の経済構造の現実的編成は、機械制大工業として確立した綿工業を中核とし、その周囲にはほぼ工場制度とによって支配された羊毛、梳毛糸、亜麻、大麻、絹、黄麻等の繊維工業、製紙業、ガラス製造業、製陶業、金属工業、造機工業などを配置し、さらに被服工業、食品工業などを問屋制的形態において維持し、しかもこれらの全部門において多かれ少なかれ手工業的中小工業を存続せしめていたのであり、そのうえ農業部面にいたっては第2次エンクロージャーを完了し、スピーナムランド法にささえられつつ、いわゆる「3分制度」にむかって発展しているとはいえ、なお19世紀の中葉においてさえ、労働者を雇用しない小規模経営が半数近くをしめる状態であった。マルクスも、このような経営形態の複雑性にもとづいた労働者人口の、典型的資本主義国としては一見奇妙にみえる構成内容について、1861年の国勢調査をもとにして次のようにのべている。「すべての繊維工場における就業者を炭坑および金属鉱山業の就業者数と合計すれば、1,208,442人となる。前者をすべての金属工場および金属加工場の就業者と合計すれば、総数は1,039,605である——どちらにしても現代の家内奴隷の数〔奴婢階級——1,208,648人……引用者〕より少い。機械の資本家的利用の成果の何というすばらしさ！²⁾」。

さてこのように19世紀の中葉において、「経済的編制からみた近代的社会が最も広汎、最も典型的に発展している」とされるイギリスにおいてさえ、その産業資本の支配が全社会的経済構造において完成されているわけではな

く、したがって「階級的編制は純粹には現われない」ばかりでなく、さらに19世紀中葉をすぎるとこの「典型」化乃至「純粹」化へのたえざる「傾向」さえ頭うちとなり、金融資本的蓄積へと移行せざるをえなかったという、資本主義の歴史的発展の現実の様相は、資本主義の「内的構造」の理論化にかんしてきわめて困難な方法的問題を課することになる。

『資本論』では、19世紀中葉のイギリスにおいてさえ「中間諸階級および過渡的諸段階がたえず限界諸規定を隠蔽している」とはいえ、三大階級への純化に表現される、その産業資本的蓄積様式の世界的拡大と終局的支配とが、さけることのできない「資本家の生産様式のたえざる傾向であり、発展法則である」という歴史認識にもとづいて、「資本家の生産様式の内的構造」の究明をとおしてみちびかれた「資本家の生産様式の諸々の自然法則」は、現実の歴史過程においても「頑強な必然性をもって作用して自己を貫徹」し、「産業的に発展した国」にも「発展のおくれた国」にも一様に作用しつつ、結局「ひとつの有機体」としての資本主義の世界的支配を完了するにいたるという点に、いわゆる理論的展開と歴史的発展との究極的対応乃至一致がもとめられていた。つまり資本主義の発展にともなって「産業的に発達した国は、発展のおくれた国にたいし、他ならぬそれ自身の将来の姿を示す」ばかりでなく、『資本論』の体系的展開の帰結たる、三大階級の純粹な社会編制が、あらゆる国々の終局的にゆきつく「将来の姿を示す」ことになるはずであった。

このような歴史把握を前提として、『資本論』は、それ自身資本主義社会の「内的構造」の解明であると同時に、資本主義の歴史的「発展法則」をも明らかにするものであり、その意味において、資本主義の歴史的発展とその内的構造の論理とは統一されて『資本論』体系のうちに総括されと考えられていたわけである。そして当然これは、マルクスにおける資本家の生産様式の「内的構造」の一般的理論化が、資本主義の発展過程自体によってその論理構成の必然的展開を保証されていたからであり、いいかえれば対象自体がその経済的編制の純粹化を自己自身によって逐行していることを基礎とし

たたんなるその論理的反映としての体系化にはかならなかったことを示すものであった。

しかし「経済的編制」の「典型」化と「階級的編制」の「純粹」化とは、けっして「資本家的生産様式のたえざる傾向」でも「発展法則」でもなく、しかも19世紀の中葉のイギリスにおいてさえこの「典型」化乃至「純粹」化はついに完成されることなく、徐々に植民地乃至後進国との関連をとおして、その内部の「経済的編制」の「典型」化を変質せしめていかざるをえなかったという歴史的事実は、このような歴史と論理の照応というとらえ方に決定的な修正をせまるとともに、一般に資本主義の「内的構造」の理論化にたいしても方法的転換を要求することになった。

ヒルファーディグが「最近の資本主義的發展の経済的諸現象」を「W・ベティに始まり、マルクスにおいてその最高の表現を見出す古典的国民経済学の理論体系に組入れるという試み」³⁾を逐行しており、レーニンもこの書を念願におきつつ「帝国主義の基本的な経済的諸特質の関係と相互関係とを」⁴⁾、「帝国主義は資本主義一般の基本的諸特質の發展と、その直接の継続として生じたものである」⁵⁾という観点から叙述しているのは周知のとおりである。

しかし、いずれにおいても、「世界市場」を捨象し、「資本家的生産様式が生産および市民的社会のすべての部面を支配」し、「資本家的生産様式の諸条件——諸資本の自由な競争、一生産部面から他の生産部面への諸資本の移転可能性、平均利潤の同等な高さなどのような——が完全に成熟して現存していること」⁶⁾を前提として「資本家的生産様式の内的構造」の「観念的平均における叙述」をあたえた『資本論』の展開は、そのまま自由主義段階における後進国乃至植民地との特殊な関連をとおして、その産業資本的蓄積を拡大しつつあるイギリス綿工業を中核とする世界的な資本主義諸国の関連をしめすものではないということが明確となっていなかった。したがって「資本主義はその發展の一定の、きわめて高度な段階で」「はじめて資本主義的帝国主義とな」⁷⁾るとしても、この「發展の一定のきわめて高度な段階」というのは、まさに後者における世界市場に媒介された先進国と後進国との関連を

軸基とする世界資本主義の発展の「一定のきわめて高度な段階」をさすのであって、『資本論』によってしめされる「資本家の生産様式のたえざる傾向」であり、発展法則である「経済的編制」の「典型」化乃至「階級的編制」の「純粹」化の過程における「高度な段階」をさすのではないということが、すなわち「帝国主義」は『資本論』でしめされている「資本主義一般の基本的特質の発展と、その直接の継続として生じたもので」はないということが理解されていなかったのである。

このような理論的把握と歴史過程の認識における関連づけの不備乃至欠陥は、ヒルファーディングにおいてもレーニンにおいても、その帝国主義段階論の構成において根本的な難点をのこす原因となったのであるが、ここでの問題は、むしろその発展の一定の段階において、後進国乃至植民地との世界市場的関連のうちに「世界の工場」としての位置をしめることによって、その「経済的編制」の「典型的」「純粹」化を推進しつつあったイギリス資本主義の現実的「傾向」を基礎としてしか資本家の生産様式の「内的構造」の理論的究明はおこないえないにもかかわらず、しかもこのような「傾向」は、資本主義の現実的発展にとっては、一定の時期の一定の国における、いわば歴史的に局限された環境のうちでしか成立しえない、その意味ではむしろ資本主義の全歴史的展開にとってはきわめて限定された特殊な「傾向」でしかなかった、という点にある。つまりそのような局限された環境のうちでしか進行しえない歴史的「傾向」を基礎にして構成された理論体系が、何故資本家の生産様式の「内的構造」の一般的理論たりうるか、という問題である。

マルクスにおいては、この局限された環境のもとで発生する特殊な傾向を、世界的規模における資本家の生産様式の現実的発展の究極的「傾向」であるとすることによって、はじめから問題となりえなかったこのような問題が、資本主義の現実的発展過程を以上のようなものとしてとらえることによって、われわれにとっては経済学の根本的問題としてその解決を要求することになったのである。

ざやくにいえば、資本主義の歴史的発展自体が、このように発生、確立、

終末という段階的展開をとおして現実的に進展し、それぞれの段階における支配的資本の形式を商人資本、産業資本、金融資本として定在せしめるとするならば、このような歴史的発展過程から断絶され、支配的資本の具体的存在様式からも区別された、抽象的な資本家的生産様式の「内的構造」の「観念的平均」における「叙述」としての一般理論を、資本主義の現実的発展のきわめて局限された環境においてしか発生しえない、いわば特殊的「傾向」を基礎として何故構築する必要があるのか、という問題となろう。

これは資本主義の金融資本段階への転化にともなう、その「段階論」的把握と、それにともなう『資本論』の「原理論」としての純化、再構成の必要性を提唱された宇野弘蔵教授のいわゆる経済学研究における「三段階論」にたいして執拗に投げかけられてきた疑問でもあった。

すでにみてきたように、資本主義の帝国主義段階への転化は、自由主義段階における世界資本主義の発展の必然的結果としておこったものであり、その限りでは、帝国主義段階乃至金融資本の支配の必然性と、その基本構造とは、自由主義段階における世界資本主義の全体的構造の把握を前提としてしか解明されえないであろう。そして自由主義段階における世界資本主義の全体的構造は、いうまでもなく「世界の工場」としてのイギリスと、これを中心に世界市場の内部で原料および穀物の供給国として、またイギリスの綿製品の世界市場としての役割をあたえられつつ、それぞれ独自の旧社会関係の破壊過程をとおして急速に資本主義化の道をたどる後進諸国との複合体としてしか存在しえない。このような諸資本主義国の複合体としての世界資本主義が、いわゆる自由主義的対外関係をとおして、綿工業を中核としてその「経済的編制」を産業資本の専一的支配へと純化しつつあるイギリス資本主義の運動機構の外延的展開の過程にまきこまれつつ、その基本的発展をたどるかぎりにおいて、この資本主義は世界史発展の自由主義段階として位置づけられるわけである。

もちろん後進諸国は、この段階にあっても、『資本論』で想定されていたように、イギリスにおけると同様の「経済的編制」へと純化されつつあるの

ではけっしてなく、多かれ少なかれ保護貿易政策によって援けられつつ、工業部門においても農業部門においても独自の資本主義化の様相を展開することになるのであるが、それらの独自の資本主義化の内容も、この世界市場を媒介とする世界的な資本主義化の動向にたいしてはけっして積極的な影響をあたえることなく、終局的にはイギリス資本主義の圧倒的に高度な生産力を基礎とする商品経済的支配力のうちに、その資本主義化の方向を決定されつつ独自の発展をとげるという意味において、この段階においては、イギリス資本主義の世界資本主義支配の体制にたいし副次的な位置をあたえられるにすぎないのである。

後進国ドイツの、重工業を基軸とし株式会社形式を媒介とする急速な資本主義化が、このようなイギリスを中核とする世界資本主義の体系的編制にたいし決定的な影響をあたえ、イギリス資本主義自体がすでにドイツの、さらにおくれてはアメリカの資本主義化の動向との対応において、その経済的編制の変質を余議なくされるにいたると、資本主義はその世界史的発展過程において新たな段階に転化したことを意味する。

さらにさかのぼっていえば、いわゆる本源的蓄積の時期を資本主義の初期段階としての重商主義段階として把握しうるのも、この時期が自由主義段階において世界経済の運動機構の中核としての位置をしめたイギリス資本主義の成立の根本的前提を形成しつつあるという、その歴史的意義を根拠となされるのである。もともと「本源的蓄積の相異なる諸契機は、多かれ少なかれ時間的序列をもって、殊にスペイン、ポルトガル、オランダ、フランスおよびイギリスに配分される」のであり、一般的に旧来の社会組織を解体せしめつつ資本の諸要素を創出するという意味においては、先進国、後進国の区別なく経過しなくてはならない歴史的一過程であるにもかかわらず、イギリス資本主義の諸要素を形成することによって、同時に自由主義段階における世界的規模での資本主義化の中核を形成しつつあるという点から、イギリスにおいてのみ「これらの契機」が「体系的に総括され」、したがってイギリスにおける本源的蓄積の過程が、まさに資本主義の世界史的発展過程にお

ける初期段階として、すなわち重商主義段階として典型的に把握されることになるのである。

自由主義段階において「世界の工場」たるイギリスは、その原料および穀物の輸入と工業製品の輸出をととして世界の商品市場の中心国だったばかりではなく、それと関連した貿易金融と外国債券を主とする資本信用の供与者として、世界の貨幣市場と資本市場の中核たる位置を確保していたのは周知のとおりである。この世界市場の中に配置された後進諸国は、それぞれイギリスの高度な生産力を基礎とする貿易関係および金融関係の圧倒的規制力をうけながら、その内部の生産力と生産関係を変化せしめつつ急速な資本主義化の過程をたどることになるのであるが、この資本主義化の動向がこのようなイギリス資本主義によって規制された世界市場の内部における位地によって第一に規定され、その内部の生産力の変化もこの世界市場的関連によって枠づけられつつ進行するという意味において、この段階における諸資本主義国の複合体としての世界資本主義の歴史的発展は、まず世界市場を媒介とするイギリスの資本主義の現実的蓄積によって、その基本的方向は決定されているのである。そしてこのイギリス資本主義は、それ自体世界市場を成立環境とし、その内部は非資本主義的諸要因を包蔵しつつ運動している^(注)とはいえ、一方では自由貿易の拡大をととして、他方では非資本主義的要素の資本主義的関係への強行転化をととして、その外部も内部もすべて産業資本による完全な自立的支配関係へと変質せしめつつ、「経済的編制」の「典型」化と「階級的編制」の「純粹」化とにむかって発展してゆくのであって、このようなイギリス資本主義の内在的動力とその発現する運動機構とを、現実的な資本の運動を媒介としてそれ自体において把握したものが、ほかならぬ資本主義の「内的構造」の「観念的平均」における「叙述」なのであり、「商品にはじまって「それ自身に利子をうむ資本」で終結せしめられる純粹資本主義の理論体系なのである。

注)『資本論』において、その理論的考察の範囲内では原則として外国貿易を捨象しているのは、宇野弘藏教授によってはじめて解明をあたえられたように、「外

国貿易なるものが国内資本主義と同じ原理を体现するという限りで行い得る。いかえれば資本主義が一社会を全面的に資本主義化す傾向があり、外国貿易はその傾向を促進するものとして役立っている限りでのことである。」すなわち「外国貿易がその国の資本主義的關係にとって謂わば外部的要因としてでなく、全産業が資本主義化され、あらゆる生産物が資本主義的に生産される過程を、部分的に外国の非資本主義的な産業の生産物をもって自国の資本家の生産物に代置するという関係にある限りにおいて、捨象し得るのである。」⁸⁾つまりイギリス資本主義が、それ自体において純粋化の傾向をもっているかぎり、自由貿易による商品関係はこのイギリス資本主義にとって外部関係を内部関係へと転化せしめる機構をなするのであるが、しかしイギリス資本主義にとって外部関係をなす後進資本主義国自身は、それによってイギリス資本主義と同質の発展をなすことを保証されているのでもなければ、また強制されているのでもない。この点はイギリス国内の非資本主義的要素乃至領域のイギリス綿工業にたいする関係とは根本的に異なるのであって、後進資本主義国は自由主義段階の世界市場の關係の内部においては、イギリス資本主義を中核とするその全体的編制にみみこまれて運動しつつあるといつてよいが、しかしそれぞれの内部の資本主義化は、むしろ先進資本主義国ですでに発達をとげた機械制大工業を輸入しつつその原始的蓄積の過程を強行し、株式会社形式を広汎に採用しながら資本主義としての確立をはかるのであって、イギリスの典型的発展とは異った過程をたどるのが後進国の資本主義化の通常の状態となる。

この理論体系が、直接的には、自由主義段階におけるイギリス資本主義の綿工業を中核とする基幹産業の発展過程を現実的根拠として、つまり歴史的にも地域的にもきわめて局限された資本の運動過程を素材として、その全社会的生産の支配を「想定」することによってえられた「観念的」な「叙述」として形成されながら、しかも「生成・発展・没落」する世界史的過程としての資本主義の原理論たる位置をあたえられるというのもこの点にかかっている。

したがって、この原理論としての『資本論』体系が、資本主義の現実的発展段階の必然的な解明と、それを媒介とする経済学研究の究極目的たる現状分析とにたいしてもつ方法的関連も、この原理論の形成過程の特殊性に応じて独自の制約を課されることになる。現状分析にたいしてただちにその分析基準を提供するものではないのはもちろん、各歴史的発展段階にたいしても一

様に段階的特殊性解明の基準をあたえるものではない。

マルクスが「分析的」な下向過程にたいする「後方への旅」として規定したいいわゆる上向過程が、ひとまずそれ自体で完結する理論的な「多様なものの統一」として総括されたのであるが、さらにこの体系を基礎として「後方への旅」へ再出発するばあいには、まずこの資本主義の「内的構造」の一般的究明を媒介として、資本主義の発展段階の枢軸をなす自由主義段階におけるイギリスを中心とする世界経済の基本的編制が明らかにされなければならない。資本主義の発生過程と没落過程とは、ともにこの確立過程の段階論的究明を媒介として、その世界市場的中心国としてのイギリス資本主義の生成過程として、およびイギリス資本主義の中心性の喪失と指導的国家の分裂的対立とを内容とする世界経済の変質過程として、その必然的な成立と基本的運動機構とが解明されることになる。このような世界的な資本主義の「生成・確立・没落」の過程の中に位置づけられて、世界経済の一環を形成するものとしての各国資本主義の内部構造とその相互関係との具体的解明が、かくてマルクスのいわゆる「後方への旅」の第3の段階をなすとともに、原理論および段階論的な「多くの諸規定と諸関係」とによって媒介された具体的な「豊富な一総体性」の提示をなすことになる。

このような方法的関連によって規定される「原理論」「段階論」「現状分析」の3者の理論領域の内容は、したがって相互にきわめて異質な構造をもって相対することになる。すなわち「原理論」は、世界市場を媒介としつつ自己自身を体制的に純化しつつあるイギリス産業資本の基本的傾向を積極的根拠としてそれ自身において自立しつつ発展する「観念的」な純粋資本主義の生成・確立・完結の体系的展開として、われわれにとって完全に論理的に把握されうる対象領域をなす。この意味においてレーニンのいうように『資本論』はまさにそれ自体資本主義の「論理学」をなすのである。これにたいし「段階論」は、その対象を、このような原理論的展開の世界的拡大と編制とを基本体制とする自由主義段階における世界経済の基本構造を中心として、その生成および変質の過程としてあたえられるため、この歴史過程を軸とし

てこの3段階における経済的諸関係の相互的対照と、その特質の比較的抽出をなすことが基本的方法となる。宇野教授が、この段階論の規定を「現状分析の対象をなす諸現象から歴史的発展にとって重要な意義を有するものを抽出して、規定したもの⁹⁾にすぎない」とされ、またレーニンが「帝国主義とは資本主義の独占的段階である」という「簡単な定義」をあたえつつ「帝国主義がうたがいもなく資本主義の発展のひとつの特殊な段階だということ」を基礎として、周知の「5つの標識¹⁰⁾」において帝国主義の特徴を総括したのも、このような方法的関連において理解されねばならない。つまり宇野教授が、この段階規定の内容を「世界史的に指導的な地位」をもつ資本主義国の支配的資本形態によって基本的にあたえられつつも、他方で「実際には、その対極として、常にそれぞれの国の資本主義化におそらくは最もおくれる農業をとって規定することが必要ではないかと思う。私自身『経済政策論』でそれを殆んどなしえなかったのであるが、それは種々なる問題を残すものとい¹¹⁾ってよい」と付言されているのも、またレーニンが「この5つの基本的標識」をあたえたのちに「もしたんに主要な純経済的概念（前述の定義はこれにかぎられている）を念頭におくにとどまらず、資本主義のこの段階が資本主義一般にたいしてもつ歴史的地位、あるいは労働運動におけるふたつの主要傾向と帝国主義との関係を考慮に入れるならば、帝国主義はこれとは別様に定義することができるし、また定義しなければならない」と補足しているのも、以上のような段階論の方法を前提したうえで はじめて理解されうるであらう。

要するに「段階論」とは、生成、確立、爛熟の過程をたどる資本家的生産様式の各段階における、指導的資本主義国の生成、発展、分裂の支配的動向によって規定された経済的関係における「基本的標識」を抽出し、その相互関連を解明する過程である。したがって、その内容は『原理論』のばあいと異って、ひとつの完結した体系をなすものではなく、歴史過程から何を中心としてひきだそうとするかに応じて、レーニンのいうようにその「基本的標識」の内容も変ってこざるをえないであらう。ただ歴史過程それ自身の展開

によって示されるであろうように、その「基本的標識」を摘出すべき基準もその重要性において一定の系列をなしてあたえられるのであって、けっしてその内容は無限の探究の対象をなすものではない。宇野教授において、この『段階論』の解明の方法が、いわゆるタイプの検出として規定されるゆえんである。ただ基本的規定から遠ざかり、個別的事情へと具体化されればされるほど、それは内容としては「現状分析」のそれに近づいていかざるをえないであろう。

かくて「現状分析」の方法は、「原理論」における諸範疇の完結した体系的把握と根本的な対比をなす、対象の無限の究明の過程として特徴づけられる。ここにおいてももちろんその段階論的規定からする、世界経済における位置、支配的資本主義との関連、それを基礎とする諸々の政策的対応関係などからする、経済的諸規定における研究対象としての重要性の序列は、結局対象それ自体によってあたえられることになるであろう。しかしそれにもかかわらず、現状分析は、その「対象の性質上無限に行われるべきものであ」って、¹²⁾「そう簡単に完成された結論が得られるわけではない」という点は、原理論乃至段階論的研究との根本的相異をなすのであって、この点が、社会科学的研究成果を利用して自己の実践活動にやくだてることのできる唯一の運動主体としての社会主義政党の役割乃至意義について、重要な特質を付与することになる。すなわち「経済学の原理はそのまま社会主義の主張なり、理論なりを展開するわけではないが、しかし経済学の原理が科学的に正しく¹³⁾展開されるとき、それに応じて社会主義の主張も科学的に根拠づけられる」という原理論と社会主義の主張との関連と対応して、現状分析も、それがいかに精密化され具体化されたとしても、ただちに社会主義的实践のための戦略戦術とかわりうるものではなく、現状分析の緻密化は、たしかにこの戦略戦術決定のための「情勢判断の基礎資料」の精確化をとおしてより正しい決定基準をあたえるとしても、その最終的決定は、組織自体の政治的勢力関係をとおしてしかあたえることはできないということである。かくて社会主義的实践における具体的活動方針の決定は、科学的分析を基礎とした現状判断

によってなされるとしても、あくまで科学的分析それ自体とは別のものであり、そこにまた実践主体としての社会主義政党の存在意義もかかっている。科学的認識の実践活動にたいしてもつ、このような特有の関連については、すでにレーニンがその『何をなすべきか』の中できわめて包括的な形においてではあるが、明らかにしたところである。

- 1) レーニン『帝国主義論』(国民文庫版) 126 頁。 2) 『資』③ 719 頁。
- 3) ヒルファーディング『金融資本論』(岩波文庫版, 上巻) 9 頁。
- 4) 『帝国主義論』 20 頁。 5) 『帝国主義論』 125 頁。 6) 『資』⑫ 865 頁。
- 7) 『帝国主義論』 125 頁。 8) 宇野弘蔵『恐慌論』 48~49 頁。
- 9) 宇野弘蔵「経済学と唯物史観」(『経済評論』 1959 年, 4 月号所収) 11 頁。
- 10) 『帝国主義論』 127~8 頁。 11) 「経済学と唯物史観」 11 頁。
- 12) 宇野弘蔵『経済学方法論』 3 頁。 13) 『経済学方法論』 59 頁。

5

われわれは「原理論」が、たんに資本主義の一定の歴史的段階の、しかも地域的には局部的な発展「傾向」を現実的根拠とするにすぎない「観念的」な純粹資本主義の理論的体系として形成されながら、それにもかかわらず、資本主義の世界史的発展段階の解明の基準をあたえるとともに、この段階規定を媒介としてしか科学的な現状分析を遂行しえないという意味において、「原理論」が資本主義の全経済学的研究の根本原理をなすという点について、「原理論」の形成の過程と、その「段階論」および「現状分析」にたいする理論的基準としての具体的適用方法との二面において考察してきた。しかし原理論が資本家的生産様式の根本原理としての意義をもつのは、なおたんに以上の点につきるものではない。段階規定をとおして現状分析のための理論的基準をあたえるという、いわばその積極的適用乃至利用の側面とともに、原理論はまたそれ自体において、消極的にはあるが資本主義の歴史性をその体系的展開において反映し、したがってたんに純粹資本主義の内部構造とその運動法則を明らかにするばかりではなく、また資本主義の歴史的形成・確立・終結の過程をも、消極的にはあるが理論的にあきらかにするという側面をあわせもっているのである。

われわれが一方において、『資本論』体系をたんに産業資本の内部構造乃至運動法則の解明へと矮小化する見解を批判するとともに、他方において、『資本論』体系の構成が資本主義の歴史的発生・確立・没落の現実的過程を直接的に反映するという見解を否定してきたのもこの理由による。つまりわれわれの批判が二面的に逐行されざるをえなかったのは、『資本論』体系にふくまれているこの二面性が、その通俗的把握においては、結果としてのその主張の内容は相反するとはいえ、結局いずれかの一面を絶対化し、他の一面を否定しることによって、原理論としての『資本論』体系の歪曲化をうみだしていたからにはかならない。

さて『資本論』体系のうちに、消極的にはあるが、反映されざるをえないその歴史性とはなにか。これがわれわれの本稿においてあきらかにすべき最後の課題である。

いうまでもなく、資本家の生産様式は、その他の「経済的社会構成の前進的諸時代として」「大づかみに」規定される「アジア的・古代的・封建的」な各生産様式とは根本的に異質な経済的構造をもっている。それは後者が、いずれもその地域的歴史的差異にもとづいてさまざまなタイプに分類されうるとはいえ、結局「種族共同社会、自然的共同体」による「土地の共同体的領有¹⁾」を根拠として成立する「自給自足的な共同社会²⁾」をなすのにたいして、前者はこのような「共同体的領有」乃至「共同社会」の完全な否定によって媒介された生産的労働者の生産手段からの分離による「自由な労働者」としての措定、および客観的労働条件の「自由な資本」としての措定のうえに成立しているということである。

つまり前者——さらにひとつの生産様式をなすものではないが、過渡的乃至部分的社會形態としてのいわゆる「自由な小土地所有」もふくめて——を総括して、「労働とその物的前提との自然的統一³⁾」と規定すれば、後者は一般的に、この「自然的統一」の破壊と分離を前提とするその商品経済的再統一と規定することができるであろう。そして前者における共同体成員間の結合が、血縁的、種族的、宗教的、政治的な、あるいはまたそれらの混合した

いわば直接的人間関係にもとづいているのにならして、後者のそれは、このような直接的関係から離脱して商品経済的な関係に媒介された、いわば物と物との関係をととした間接的關係である点が、その社会構成原理に根本的な差異をもたらしている。

商品関係は、周知のように、まず「共同体の終るところに、すなわち共同体が他の共同体または他の共同体の成員と接触する点に始まる⁴⁾」とされているように、本来共同体の外部において、その自給自足的生産物部分を超えた剰余生産物を基礎として発生し、拡大した特有な社会的物質代謝の媒介過程であって、そのような意味からいって、人類の「経済的社会構成」の基本的な歴史的発展過程にたいしてつねに付随する、いわばそれ自身においては歴史的規定性を欠落した特殊部分的な物質的人間関係にすぎない。したがってこのような非歴史的社會關係が、人類史の中においてひとつの「経済的社会構造」の基本原則として、歴史的規定性を獲得しうるのは、ただ人間の社会的物質代謝の過程を完全に自己の運動過程の内部に包摂し、「完全に発達した商品生産」として自己を維持する「近代ブルジョア社会」においてだけであるのはいうまでもない。

マルクスは、単純な商品流通と、生産過程を完全にその内部に包摂した商品経済としての資本家的生産様式との、歴史的規定性におけるこのような基本的差異を、次のように要約している。「特殊な貨幣諸形態——たんなる商品等価、または流通手段、または支払手段蓄蔵貨幣および世界貨幣——は、そのいずれかの機能の相異なる範囲と相対的優越とに応じて、社会的生産過程のきわめて相異なる諸段階を示唆する。とはいえ、経験に徴すれば、これらすべての貨幣形態が形成されるためには、商品流通の比較的微弱な発展で充分である。資本〔マルクスはこのばあい産業資本をさしている——引用者〕については趣きが異なる。その歴史的な実存諸条件は商品流通および貨幣流通とともに決して定在しない。資本は、生産手段および生産手段の所有者が自分の労働力の販売者としての自由労働者を市場で見出すばあいにのみ成立するのであり、そしてこの歴史的條件はひとつの世界史を包括する。だから

ら資本は、そもそもから、社会的生産過程の一時代を告知するのである。⁵⁾

ところが商品関係は、人間のあらゆる直接的関係から分離して、経済主体としての人間と人間との関係を背後にもちながらも、それをすべて物体物の客観的關係のうちに集約しつつ、価値と使用価値との特種な媒介関係においてあらわれる。その意味では「商品交換は、それ自体の本性から生ずるもの以外には、絶対的になんらの依存関係もふくんでいない」⁶⁾のである。このように商品経済は、それ自身においては歴史的規定性を欠落しておりながら、いやむしろ欠落しているがゆえに、いかなる経済的社会構成にたいしても、その剰余生産物を基礎とする補足的経済関係として付随的に成立しながら、それ自身の自立的論理をもって運動しつつ存立するのであり、このようなマルクスのいわゆる「手でつかみうる」物対物の客観的な、かつ自立的な運動形式によって、経済的社会構成が全体として完全に規定されているのが、資本主義社会の基本的構造であり、その歴史的の特種性なのである。

そして、それ自身歴史的規定性を欠く商品経済の運動形式が、ひとつの経済的社会構成体の基本原理の発現形式となるという、この社会の独自の構造的特質を根拠として、一面においては、人類史におけるそれ以外のあらゆる生産様式と異なり、この資本主義社会においてのみ人間の社会的生産構造がはじめてそれ自体において、完全に客観的かつ理論的に把握できることになるとともに、他面において、この社会の生成と終結の過程とが、この社会の自立的運動機構の客観的完成過程を基軸として、それぞれこの社会自体の発生と没落の発展段階として区別され、この社会においてのみその歴史的展開過程が、三段階の質的に異なる発展過程として明確に区別されることになるのである。^{注)}

注) 資本主義に先行するいかなる経済的社会構成においても、このような発生・確立・終結の質的に異なる段階規定はあたえない。それらはいずれも、共同体的社会構成を前提とし、生産手段の共同体的所有を根拠として成立しているのであって、このような共同体的人開関係から疎外された物対物の非歴史的社會關係が、外部からこの直接的人開関係を破壊しつつ、その内部へ浸透することによって形成された特種の歴史的規定性をもつ資本主義社会と異なり、その発生・確立・没

落の過程にしても、かかる直接的人間関係の、他のそれにたいする量的増大乃至縮小の過程としてあらわれるにすぎず、さらにそれがいかに発展したところで、それ自体において自立的に運動する客観的歴史過程とはなりえないために、その歴史的発展過程を質的に異った発展段階において区別することは不可能なのである。もちろんこれらの社会にあっても、その生産力がその上部構造によって媒介された特有の生産関係にとって適合的に発展できないことになれば、遅かれ早かれ、別の社会構成へと変質せざるをえないであろうが、この変型の過程はただちにひとつの社会構成がそれ自体の内的関係をとおし他の社会構成へと内在的に発展してゆく過程としてあらわれるものではない。その点が資本主義の発展段階の区分とは根本的に異なるのである。

しかし資本主義社会のこのような歴史的特種性には、なお別の反面がある。元来商品経済は、人間の社会的物質代謝の過程を人間対人間の直接的関係から分離して、物対物の客観的関係をとおして、社会的に媒介する特有の形態であり、このような人間対人間の直接的関係を、物対物の客観的な関係に転化して処理するという性質のゆえに、それは地方的、小集团的な狭隘な直接的人間関係から離れて、インターローカルな、したがってその発展の終局においてはかならず世界市場の形成へとみちびかれる、普遍的な社会関係として成立しているのである。資本主義が、それ以前の生産様式と異なり、世界市場を媒介とし、イギリス資本主義によってその全体的編制および運動の中核を規定された世界的体制として、すなわち、はじめて人類における世界史的過程を確立しつつある歴史的形成体として成立するのも、商品経済のこのような基本的性格にもとづくのであるが、しかし本来、直接的人間関係の外部に剰余生産物を基礎として発生し、物を物自身の関係によって客観的に処理する唯一の社会的機構としての商品経済は、人間の社会的生産過程を全面的に支配するのには、それ自身根本的な制約になっている。

商品経済が人間の社会的生産過程を全面的に支配するというのは、いうまでもなく、たんに生産物を商品化するだけでなく、生産過程自身をも商品化することであり、現実的には生産過程の客体的条件としての生産手段および生活資料とその主体的力能としての労働力とをともに完全に商品化することである。そしてこのばあい、生産手段も生活資料も総括してあらゆる物を生

産しうる唯一の主体的力能としての労働力の商品化こそが、この生産過程の商品経済的支配の全関連を集約する根拠をなしており、したがってこれをもって「商品経済の発展の極点として理解すべき」であることはいうまでもない。そしてもともと物自身によって物を処理する客観的機構としての商品経済による社会的生産過程の支配にとって、あらゆる物を生産しうる主体的力能でありながらそれ自身はあくまでも物ではないこの労働力の商品化こそが、その確立の絶対的基礎であるとともに、また絶対的制約としてあらわれることになる。

産業資本の「成立」のための「歴史的條件はひとつの世界史を包括する」というのも、この点にかかわるのであって、いいかえれば資本主義成立の根底をなす労働力商品化のための条件は、たんに商品経済の拡大自体が形成するのではなく、商品経済をともないつつ展開してきたそれまでの人類の世界史的総括としてあたえられるということであり、このことはまた逆転して、商品経済による社会的生産過程の完全なる支配も、その根底を形成する労働力の商品化という、いわばその体制存立の基盤が、商品経済それ自体にとっては、全面的には処理しえない、人類の世界史的発展における一定段階の生産力によって外的にあたえられたものであることをしめしている。商品経済による社会的生産過程の完全な支配、労働力商品化の完成といっても、それは、根本的には人類史における一定の生産力段階によってあたえられた外的条件によって規定されており、産業資本はこれを一定の限界内で自己の内部機構をとおして再生産しつつ確保するというかぎりでは、その自立性を保持しているにすぎない。

資本主義の歴史的発展過程が、発生・確立・終結という3段階をとおして展開し、しかもその3段階のいずれも、けっして商品経済自体の内在的成果としてあたえられるのではなく、特定の国の他の諸国との関連における中心的指導国としての形成、確立およびその中心性の崩壊と分裂の過程のうちにあらわれるというのも、さらにまた商品経済が社会的生産の諸部門を完全に支配しつつある限定された時期と地域とをとってみても、このような発展

「傾向」は、世界市場の内部において、自国を「世界の工場」とし、他の後進地域を農業国として位置づけるという特有の世界的体制編制を媒介として、はじめて局部的に成立しうる現実的「傾向」にすぎないということも、このような商品経済による社会的生産支配の限度を具体的にしめしているのである。

もちろん、資本主義の「内的構造」を、その社会的生産の商品経済による完全なる支配という現実的「傾向」を根拠として「想定」された純粋資本主義の「観念的」体系において解明する「原理論」にあっては、このような資本主義の発生、確立、終結の過程における「歴史的條件」そのものは、すでに外部からあたえられたものとして、その「内的構造」を論理的にあきらかにするほかはなく、したがって具体的には非商品経済乃至非資本主義的領域との相互関連をとおしてのみ進行する資本主義の現実的發展過程は、その理論的展開に反映せしめられないことはいうまでもない。

しかし、資本主義の現実的發展が、このような非資本主義的領域との相互関連をとおしてのみ進行し、その存立の「歴史的條件」は、商品経済の外部からあたえられるという資本主義のもつ歴史的特殊性は、資本主義の「内的構造」の究明においては、もともと社会的生産の外部にその自立的展開をもつ流通形態による社会的生産の包摂の結果として、この生産様式は、その経済的社会的構成としての特殊性と自立的性とを維持している点においてあらわれるのである。すなわち流通形態の流態形態としての自立的展開と、その内部への社会的生産の包摂による特殊的社会的生产関係としての確立、およびその成果たる自立的生産様式としての完成、という体系の編制においてしか、資本主義の「内的構造」の理論的究明は逐行されえないという点に、まさにこの生産様式の歴史性が、消極的にはあるが、表現されている。

われわれは、さきにマルクスが、資本家的生産様式の一般理論を、その「内的構造」の「観念的平均」における「叙述」として構成するばあい、
「もっとも抽象的なカテゴリー」といえども、その抽象性のゆえに、かえって「完全に発展したブルジョア社会」を根拠としてしか把握できないとして、

その対象を「想定」された「純粹」な資本主義的關係のうちにもとめながら、しかもこのカテゴリーの「序列」は、「資本の歴史的発展」との照応においてあたえられるとする概念構成乃至編別展開の方法をとることによって、いわば対象設定と概念構成とにおける二元的方法の交錯のうちに、その「経済学の方法」を集約しているのをみたが、この方法は、19世紀末からの資本主義の現実的發展を根拠とする経済学の段階的分化によってあたえられた、資本主義の歴史的発展段階論と分離された純粹資本主義の体系的編制としての「原理論」においても貫徹されていることを確認しなければならない。

すでにみたように、資本主義の成立にとっては、ふたつの歴史的前提が必要であった。ひとつは、人類の社会的生産力が、すでに共同体的な狭隘な社会關係をもっては支配できないまでに發展していることであり、他のひとつは、商品經濟が世界市場的關連のもとに、世界商業として發展をとげているということである。歴史的過程においては、当然このふたつの關係は、別々の過程として分離してあらわれるものではなく、前者が後者の生産力的基礎をなすとともに、後者はさらに前者の生産力の増大と、それを媒介とする生産關係の破壊とを推進する關係において、交錯してあらわれるのであるが、しかしまたこの両者の關連は、ただちに唯物史觀にいわゆる生産力と生産關係との矛盾としてあらわれるものでもない。この時代を歴史的には社会構成の過渡段階として処理せざるをえないゆえんである。純粹資本主義とは、このような過程をとおして局部的に發生し、拡大する資本家の生産様式の展開を理論的に反映しつつ、商品經濟による社会的生産の全面的支配關係として「想定」したものである。

したがって、この純粹資本主義においては、その基礎をなす生産力の一定の發展は、最初からあたえられたものとして前提されるとともに、かえってその量的規定性は具体的に把握できないものとして、一般的にこの純粹資本主義の生産關係をとおしてあらわれる以外にないことになる。つまり具体的にはイギリス綿工業における生産力を基礎として把握されながら、理論的に

は、このような特殊な生産部門における一定の量的に規定できる関係から抽象されて、一般に機械制大工業に支配されつつ資本の自由な移動に媒介された剰余価値率の増大の機構として把握される以外にないのである。

これにたいし、いまひとつの資本主義成立の契機である商品経済の世界市場的発展の側面は、資本主義の質的規定性としてあらわれ、純粋資本主義における生産関係の理論的把握の前提として、その全面的な解明が要求せられることになる。つまり、純粋資本主義とは、現実には歴史的過程をとおして培養されてきた一定の生産力を基礎として具体化する資本家的生産様式の全面的支配の「傾向」を、純化しつつ、理論的に再構成したものであり、したがって、この純化の過程において、この生産力の量的規定性は、一般にこの資本主義の成立にとって前提されることによって、かえって具体的な規定性としては捨象されることになるが、もともと歴史的規定性を欠落している商品経済は、ぎゃくにこの資本家的生産様式においてのみ歴史的質としての規定性を付与されることによって、その全面的な展開をもって、資本主義成立の前提を理論的に解明する過程としてあらわれることになる。

純粋資本主義の体系的編制は、このような構造において、資本家的生産様式の歴史的発展の過程を、理論的にあきらかにすることになるのである。

かくて、流通形態の理論的解明が、一面では資本主義の発生過程を理論的に跡づけるものとして展開されながら、しかも他面では、この商品・貨幣・資本の理論的解明も、商品経済が社会的生産過程を全面的に支配したものとして「想定」された純粋資本主義における形態規定としてしかあたえられないという、経験的乃至悟性的認識にとっては一見矛盾してあらわれる関係も、このような歴史過程を理論化する独自の方法のもたらした必然的結果として理解されねばならない。

宇野教授が、『資本論』が一般の経済学と異った方法を示している」点について「それが資本主義の切断面を解剖しながら、それを単に平面的なものとしてではなく、歴史的過程の断面として取扱っている点にあるが、しかしそれは同時にまた、所謂演繹的方法とか、帰納的方法とかという簡単なる方

法を許さないことになるのであった。恰かも樹木の年輪においてその樹木の成長過程自身を見るような関係にある⁸⁾と説明されているのも、まさにこのような「原理論」の方法的特殊性をしめされたものであった。

純粋資本主義においては、その成立の歴史的條件としての一定の生産力の発展段階が、全体系の前提としてあたえられているために、これによって基礎づけられた生産関係の理論構造が、いわば概念自体の自己発展の過程として体系的に構成されることになっているのである。したがって、この体系が、歴史過程をも反映するといっても、たとえばその中の商人資本形態の展開が、ただちに重商主義段階における商人資本の基本的構造をあきらかにするものとしてあたえられているわけではない。重商主義段階における商人資本は、たんに市場における価格関係の差を利用して増殖する商人資本形式における資本とは異って、中世紀的な歴史過程をとおして形成された特定の地域における具体的な社会的生産力を基礎として、直接的生産者の生産手段からの分離を促進しつつ、生産過程そのものを漸次に支配してゆく特殊な資本種類として、はじめて内容的に規定されうるのであって、原理論における資本形態は、たんにその流通形態としての規定性をあきらかにするにすぎない。さきに原理論において反映せしめられる歴史性は、消極的な対応関係において把握されなければならないといったのはこの意味である。

したがってまた、原理論の完成が、宇野教授のいわゆる「それ自身に利子を生むものとしての資本」の規定においてあたえられるとしても、この利子うみ資本の範疇は、資本主義の終末期であり爛熟期である帝国主義段階における支配的資本形式としての金融資本の規定を内容的にあきらかにするものではない。金融資本においても、19世紀末から20世紀にかけての後進国における重工業を基軸とした蓄積と、先進国における資本輸出を中心とする蓄積との具体的な世界的関連における対立関係を媒介とせずには、その内容的規定をあたえることはできないのであって、ただ利子うみ資本は、この資本範疇の形態的意義をあきらかにすることによって、具体的な歴史過程の解明にたいする消極的基準をあたえているにすぎない。すなわちそれは、利子う

み資本が資本形態における最高の発展形態であることを理論的にあきらかにすることによって、この資本形態の現実的な歴史過程の支配をもって資本主義社会の最終的発展段階たらざるをえないことを抽象的にあきらかにしているのである。ここでもまた、原理論における理論的展開の歴史過程との照応は、まさに消極的たらざるをえないのである。

かくて現状分析の前提となる資本主義の世界的発展段階の基本構造をあきらかにするためには、一定の時期に、しかも局部的に進展するにすぎない資本主義の「経済的編成」における「典型的な発展」の過程を積極的根拠として構築された「純粋資本主義」の理論体系が、「想定」されねばならないが、しかしこの「純粋資本主義」の理論体系は、産業資本としての綿工業を基軸とする自由主義段階のイギリス資本主義の構造を、直接的なその素材的基礎として形成されながら、しかもその理論化の過程において、このような特定の国における具体的な国際関係に媒介された一定の生産力を内容とするその経済構造は、すべて純粋な経済学的カテゴリーの自己編製の体系的構成のうちに抽象されて、商品形態の自己展開とその体系的綜括としてあらわれざるをえないために、この「純粋資本主義」の体系は、けっして産業資本の支配する経済体制の「横断面」的構造分析としてではなく、それ自身のうちに資本主義の歴史性を、商品経済的関連のうちに抽象化しつつ、商品経済的論理としては完全に、それゆえしかし現実の歴史過程との関連においては消極的に、表現することになるのである。

- 1) 『綱要』 376 頁。
- 2) 『綱要』 380 頁。
- 3) 『綱要』 375 頁。
- 4) 『資』① 196 頁。
- 5) 『資』② 319 頁。
- 6) 『資』② 315 頁。
- 7) 宇野弘蔵「労働力なる商品の特殊性について」(『価値論の研究』所収) 181 頁。
- 8) 宇野弘蔵「『資本論』による社会科学的方法の確立」(『資本論の研究』所収) 32 頁。